近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ

２０１３（平成２５）年　８月

三重県埋蔵文化財センター

筆ヶ崎５・６号墳（南から）

北山城跡ＳＨ 209・236（南から）

例　　言

1　本書は、平成24年度に実施した近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。

2　調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

3　調査は、下記の体制で実施した。

委託者　中日本高速道路株式会社

受託者　三重県

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究Ⅲ課（四日市駐在）

課長　森川常厚

主幹　服部芳人・松永公喜・浅野隆司・町井秀行

主査　鈴木規之・宮崎久美・水橋公恵・中村法道・勝山孝文・山田　猛

主事　東谷洋平・矢田　陽

技師　高松雅文・宮原佑治・小原雄也

4　調査面積・期間等は下表による。

遺跡名（調査次）	調査面積	調査期間	担当者	作業受託
北山C遺跡（第２次）	4,350㎡	H24.10.10～H25.3.18	森川・鈴木	安西工業(株)
野中遺跡（一次）	500㎡			
北山A遺跡（第３次）	4,130㎡	H24.5.18～H25.2.25	松永・東谷	大成エンジニアリング(株)
中野山遺跡（第８次）	3,012㎡			
中野山遺跡（第９次）	7,700㎡	H24.5.18～H25.1.15	浅野・中村・山田	(株)二友組
筆ヶ崎古墳群（第３次）	9,100㎡	H24.5.18～H25.2.28	宮崎・水橋・高松	(株)島田組
北山城跡（第２次）	6,426㎡	H24.5.24～H25.1.21	勝山・矢田・宮原	(株)アーキジオ
小牧南遺跡（工事立会）	165㎡	H24.11.19	服部	(労務提供)
小牧南遺跡（一次）	800㎡	H24.12.20～H25.3.22	松永・宮原	橋本技術(株)
野添御飯山古墳（一次）	200㎡			
大松遺跡（一次）	180㎡	H24.12.21～H25.2.22	中村・矢田	(有)安立水道
折子遺跡（一次）	800㎡			
高ノ瀬遺跡（一次）	1,580㎡	H24.12.20～H25.2.28	浅野・東谷	西武緑化(有)
東荒野遺跡（一次）	500㎡			
小社遺跡（第２次）	1,573㎡	H24.10.19～H25.2.5	小原	(株)四門
小社遺跡（一次）	400㎡			
釜垣内遺跡（第２次）	8,500㎡	H24.5.24～H24.11.26	鈴木・小原	(株)四門
釜垣内遺跡（一次）	200㎡			

5　発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の諸先生・諸氏にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

千葉豊　渋谷綾子　津村善博（順不同・敬称略）

6　本書で示す方位はすべて世界測地系を用いた座標北で示している。

7　本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。

ＳＨ：竪穴住居　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　ＳＦ：煙道付炉穴・集石炉

ＳＸ：墓　ＳＺ：不明遺構　Ｐｉｔ・Ｐ：ピット・柱穴

本　文　目　次

1　前言 ……（森川）…… 1
2　北山Ｃ遺跡（第２次）・西山古墳群 ……（鈴木）…… 6
3　北山Ａ遺跡（第３次）……（東谷）…１２
4　中野山遺跡（第８次）……（松永）…１５
5　中野山遺跡（第９次）……（中村）…１８
6　筆ヶ崎古墳群（第３次）……（宮﨑）…２３
7　北山城跡（第２次）……（矢田）…２９
8　小社遺跡（第２次）……（小原）…３５
9　釜垣内遺跡（第２次）……（小原）…３７
10　野中遺跡（一次）……（森川）…４３
11　小牧南遺跡（一次）……（松永）…４４
12　野添御飯山古墳群（一次）……（宮原）…４６
13　大松遺跡（一次）……（矢田）…５２
14　高ノ瀬遺跡（一次）……（浅野）…５３
15　折子遺跡（一次）……（中村）…５４
16　東荒野遺跡（一次）……（浅野）…５５
17　小社遺跡（一次）……（小原）…５６
18　釜垣内遺跡（一次）……（小原）…５７
19　小牧南遺跡（工事立会）……（服部）…５８

写　真　目　次

表紙（表）　中野山遺跡第９次調査区全景
表紙（裏）　筆ヶ崎４号墳出土の耳環
巻頭図版　筆ヶ崎５・６号墳
　　北山城跡ＳＨ209・236

１　前言

写真１　現地説明会・・・・・・・・・・・・・・5
写真２　体験発掘・・・・・・・・・・・・・・5

２　北山Ｃ遺跡（第２次）・西山古墳群

写真３　調査区全景・・・・・・・・・・・・・6
写真４　西区全景・・・・・・・・・・・・・・6
写真５　ＳＤ６遺物出土状況・・・・・・・・・6
写真６　１～３号墳（ＳＤ19・８・７）・・・・7
写真７　７号墳（ＳＤ55）遺物出土状況　・・・8
写真８　８号墳（ＳＤ53）・・・・・・・・・・8
写真９　９号墳（ＳＤ52）・・・・・・・・・・8
写真10　10号墳（ＳＤ58）・・・・・・・・・・8
写真11　東区全景（拡張前）・・・・・・・・・9
写真12　８号墳（ＳＤ53）器形土器出土状況・・10
写真13　８号墳（ＳＤ53）出土須恵器蓋・・・・11
写真14　８号墳（ＳＤ53）出土器形土器・・・・11
写真15　ＳＨ59・・・・・・・・・・・・・・・11
写真16　ＳＢ62・・・・・・・・・・・・・・・11

３　北山Ａ遺跡（第３次）

写真17　調査区全景・・・・・・・・・・・・・12
写真18　ＳＢ223・・・・・・・・・・・・・・14
写真19　ＳＢ237・・・・・・・・・・・・・・14
写真20　ＳＢ246・・・・・・・・・・・・・・14
写真21　ＳＨ204・ＳＫ210・・・・・・・・・・14
写真22　ＳＨ245・・・・・・・・・・・・・・14
写真23　ＳＨ227・・・・・・・・・・・・・・14
写真24　ＳＫ201・202・・・・・・・・・・・・14
写真25　ＳＫ241・・・・・・・・・・・・・・14

４　中野山遺跡（第８次）

写真26　ＳＦ1203・・・・・・・・・・・・・・15
写真27　ＳＢ1201・・・・・・・・・・・・・・15
写真28　調査区南側　・・・・・・・・・・・・15
写真29　調査区全景　・・・・・・・・・・・・16
写真30　ＳＨ1223・・・・・・・・・・・・・・17
写真31　ＳＫ1214・1215・1216・・・・・・・・17
写真32　ＳＦ1212・・・・・・・・・・・・・・17

５　中野山遺跡（第９次）

写真33　ＳＫ1312・・・・・・・・・・・・・・18
写真34　調査区北東部・・・・・・・・・・・・18
写真35　ＳＨ1331・・・・・・・・・・・・・・20
写真36　ＳＨ1305・・・・・・・・・・・・・・20
写真37　ＳＨ1318カマド出土土師器・・・・・・22
写真38　ＳＨ1320・・・・・・・・・・・・・・22
写真39　ＳＢ1309・・・・・・・・・・・・・・22
写真40　ＳＢ1328・・・・・・・・・・・・・・22

６　筆ヶ崎古墳群（第３次）

写真41　３号墳・４号墳・10号墳・・・・・・23
写真42　３号墳石室・・・・・・・・・・・・・23
写真43　４号墳石室遺物出土状況・・・・・・25
写真44　４号墳出土須恵器・・・・・・・・・26
写真45　ＳＨ65カマド・・・・・・・・・・・・27
写真46　漆状有機物の付着した須恵器杯・・・・27
写真47　ＳＢ169・170周辺・・・・・・・・・28

７　北山城跡（第２次）

写真48　調査区全景　・・・・・・・・・・・・29
写真49　調査区東部遺構配置状況・・・・・・30
写真50　ＳＨ209・236遺物・炭化物出土状況　・30
写真51　ＳＫ261完掘状況・ＳＫ236石組・・・・30
写真52　ＳＨ205出土高杯　・・・・・・・・・33
写真53　ＳＤ246出土パレス壺　・・・・・・・33
写真54　ＳＨ228上層遺物出土状況　・・・・・33
写真55　ガラス小玉・小型砥石・刀子・鉋・・・34

８　小社遺跡（第２次）

写真56　調査区遠景　・・・・・・・・・・・・35

写真57　ＳＫ14大礫出土状況・・・・・・・・・36
写真58　ＳＫ14大礫取り上げ後・・・・・・・・・36
写真59　一石五輪塔・・・・・・・・・・・・・・36

9　釜垣内遺跡（第２次）

写真60　調査区遠景・・・・・・・・・・・・・・37
写真61　ＳＫ50遺物出土状況・・・・・・・・・37
写真62　ＳＸ60遺物出土状況・・・・・・・・・39
写真63　ＳＸ76・78・79・・・・・・・・・・・39
写真64　ＳＸ76山茶椀・小皿出土状況・・・・・39
写真65　ＳＸ76・・・・・・・・・・・・・・・39
写真66　ＳＸ76和鏡・鉄製品等出土状況・・・・39
写真67　ＳＸ78遺物出土状況・・・・・・・・・40
写真68　ＳＸ79遺物出土状況・・・・・・・・・40
写真69　ＳＸ80遺物出土状況・・・・・・・・・40
写真70　ＳＢ106　・・・・・・・・・・・・・・41
写真71　ＳＢ106柱穴遺物出土状況①　・・・・・41
写真72　ＳＢ106柱穴遺物出土状況②　・・・・・41
写真73　ＳＢ106柱穴遺物出土状況③　・・・・・41
写真74　ＳＢ106柱穴遺物出土状況④　・・・・・41
写真75　ＳＢ106柱穴遺物出土状況⑤　・・・・・41
写真76　ＳＸ110遺物出土状況　・・・・・・・・42

10　野中遺跡（一次）

写真77　Ｔ１・・・・・・・・・・・・・・・・43
写真78　Ｔ３・・・・・・・・・・・・・・・・43
写真79　Ｔ４・・・・・・・・・・・・・・・・43
写真80　Ｔ１検出状況・・・・・・・・・・・・43

11　小牧南遺跡（一次）

写真81　Ｔ３・・・・・・・・・・・・・・・・44
写真82　Ｔ10・・・・・・・・・・・・・・・・45
写真83　Ｔ11・・・・・・・・・・・・・・・・45

12　野添御飯山古墳群（一次）

写真84　Ｔ１・・・・・・・・・・・・・・・・47
写真85　Ｔ６・Ｔ５境界断割り土層・・・・・・50
写真86　Ｔ６傾斜地の赤褐色シルト・・・・・・50
写真87　浚われなくなった野添マンボ・・・・・51

13　大松遺跡（一次）

写真88　Ｔ１・・・・・・・・・・・・・・・・52

14　高ノ瀬遺跡（一次）

写真89　Ｔ10・・・・・・・・・・・・・・・・53
写真90　Ｔ10・・・・・・・・・・・・・・・・53
写真91　Ｔ21・・・・・・・・・・・・・・・・53
写真92　Ｔ14・・・・・・・・・・・・・・・・53

15　折子遺跡（一次）

写真93　Ｔ３・・・・・・・・・・・・・・・・54
写真94　Ｔ４・・・・・・・・・・・・・・・・54

16　東荒野遺跡（一次）

写真95　Ｔ１・・・・・・・・・・・・・・・・55
写真96　Ｔ３・・・・・・・・・・・・・・・・55
写真97　Ｔ５・・・・・・・・・・・・・・・・55

17　小社遺跡（一次）

写真98　Ｔ２・・・・・・・・・・・・・・・・56

18　釜垣内遺跡（一次）

写真99　Ｔ２・・・・・・・・・・・・・・・・57
写真100　Ｔ４・・・・・・・・・・・・・・・・57

19　小牧南遺跡（工事立会）

写真101　調査区・・・・・・・・・・・・・・・58

挿　図　目　次

1　前言

図１　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・3
図２　北山Ｃ遺跡調査区位置図・・・・・・・・4
図３　四日市北ＪＣＴ付近調査区位置図・・・・4
図４　小社遺跡調査区位置図・・・・・・・・・5
図５　釜垣内遺跡調査区位置図・・・・・・・・5

2　北山Ｃ遺跡（第２次）・西山古墳群

図６　西区遺構配置図・・・・・・・・・・・・7
図７　東区遺構配置図・・・・・・・・・・・・9
図８　８号墳（ＳＤ53）平面図・・・・・・・・10
図９　８号墳（ＳＤ53）出土遺物実測図・・・・10

3　北山Ａ遺跡（第３次）

図10　遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・13

4　中野山遺跡（第８次）

図11　遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・16

5　中野山遺跡（第９次）

図12　ＳＫ1312実測図・・・・・・・・・・・18
図13　遺構平面図　・・・・・・・・・・・・・19
図14　調査区東部
　　縄文～飛鳥・奈良時代の遺構・・・21
図15　竪穴住居出土須恵器実測図・・・・・・・22

6　筆ヶ崎古墳群（第３次）

図16　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・24

7　北山城跡（第２次）

図17　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・31
図18　ＳＨ209･236実測図　・・・・・・・・・・32

8　小社遺跡（第２次）

図19　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・36

9　釜垣内遺跡（第２次）

図20　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・38
図21　縄文土器実測図・・・・・・・・・・・・41

10　野中遺跡（一次）

図22　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・43

11　小牧南遺跡（一次）

図23　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・44
図24　一次調査結果・・・・・・・・・・・・・45

12　野添御飯山古墳群（一次）

図25　調査区配置図・マンボ分布図・・・・・・46
図26　１号墳平面図・断面模式図・・・・・・・47
図27　２号墳平面図・断面模式図・・・・・・・48
図28　２号墳断割り土層図・・・・・・・・・・49
図29　Ｔ５・Ｔ６出土遺物実測図・・・・・・・49

13　大松遺跡（一次）

図30　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・52

14　高ノ瀬遺跡（一次）

図31　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・53
図32　Ｔ14土層図・・・・・・・・・・・・・・53

15　折子遺跡（一次）

図33　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・54

16　東荒野遺跡（一次）

図34　東荒野遺跡周辺の遺跡・・・・・・・・・55
図35　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・55

17　小社遺跡（一次）

図36　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・56
図37　弥生土器実測図・・・・・・・・・・・・56

18　釜垣内遺跡（一次）

図38　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・57

19　小牧南遺跡（工事立会）

図39　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・58

表　目　次

1　前言

表１　近畿自動車道名古屋神戸線
埋蔵文化財発掘調査経過表・・２

表２　普及公開活動一覧・・・・・・・・・・・２

3　北山Ａ遺跡（第３次）

表３　古代の掘立柱建物一覧・・・・・・・・・12

表４　古代の竪穴住居一覧・・・・・・・・・・12

4　中野山遺跡（第８次）

表５　古代の掘立柱建物一覧・・・・・・・・・15

表６　古代の竪穴住居一覧・・・・・・・・・・17

5　中野山遺跡（第９次）

表７　竪穴住居一覧・・・・・・・・・・・・・20

表８　掘立柱建物一覧・・・・・・・・・・・・20

11　小牧南遺跡（一次）

表９　一次調査結果一覧・・・・・・・・・・・45

1　前　　言

1．はじめに

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）の四日市JCT～亀山西JCTにかかる埋蔵文化財発掘調査を、平成20年度から実施している。

平成20年度から平成23年度に実施した発掘調査の概要は、発掘調査概報Ⅰ[1]および同Ⅱ[2]として、また、平成20年度に発掘調査を実施した伊坂窯跡と平成21年度に発掘調査を実施した伊坂遺跡第3次・第5次調査の結果については発掘調査報告[3]を刊行し、公表している。その中に当該遺跡の発掘調査成果はさることながら、新名神高速道路の概要や発掘調査に至る経緯、保護措置などについても記載しているため、参照されたい。

2．平成24年度の調査

（1）現地調査

発掘調査は最盛期を迎え、当埋蔵文化財センターでは職員の1／3を四日市整理所に駐在させ、当事業に対処した。当初の計画としては、伊坂城跡、北山C遺跡、北山A遺跡、中野山遺跡、筆ヶ崎古墳群、北山城跡、小牧南遺跡、小社遺跡、釜垣内遺跡の9遺跡の二次調査（計47,850㎡）、野中遺跡、小牧南遺跡、中野平古遺跡、野添御飯山古墳、高ノ瀬遺跡、折子遺跡、東荒野遺跡、小社遺跡、釜垣内遺跡の9遺跡の一次調査（計6,340㎡）、合計54,190㎡が予定された。当年度も用地問題等の進捗を踏まえて、発掘調査計画を確認しあう定例会を、中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所、三重県県土整備部新名神推進課の3者で概ね2ヶ月に1回定期的に開催し、調査計画と用地問題、工事計画との調和を図った。そのなかで、用地問題未解決により、伊坂遺跡の二次調査、中野平古遺跡の一次調査を、発掘調査工程の都合から小牧南遺跡の二次調査を中止し、替って大松遺跡の一次調査、小牧南遺跡では小規模な工事立会を実施した。北山C遺跡においては遺構分布範囲が東に広がり、二次調査対象面積を拡大して実施したが、遺跡範囲そのものが拡大することが明白となった。そこで平成25年3月11日付教埋第499号にて周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を三重県教育委員会教育長へ通知した。結果的には、二次調査等を計44,956㎡、一次調査を計5,160㎡、合計すると50,116㎡の調査を行った。

なお、野添御飯山古墳、大松遺跡、折子遺跡、東荒野遺跡の4遺跡においては今回の一次調査をもって、事業地内遺跡面積計21,600㎡の発掘調査を完了した。

（2）室内調査

現地調査に重点をおいたため、室内調査においては出土遺物の洗浄・注記等の一次整理及び遺物実測等の二次整理作業を行ったに止まる。

3．その他

調査の概要は報道機関へ資料提供を行うとともに現地説明会を10月13日に北山A遺跡、中野山遺跡、北山城跡で、12月1日に筆ヶ崎古墳群で実施した。さらに、釜垣内遺跡では8月27日～29日の3日間、調査現場を一般に公開し、地元の講座や高等学校での授業においても発掘調査の成果を解説している。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』 2010

② 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 2012

③ 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』2011
三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡（第3次）発掘調査報告』2012

No	遺跡名	所在地	事業地内遺跡面積(㎡)	一次調査後施工可面積(㎡)	20年度 一次調査	21年度 一次調査	22年度 一次調査	23年度 一次調査	24年度 一次調査	遺跡別調査合計面積(㎡)	未調査面積(㎡)	備　考
1	伊坂遺跡・伊坂城跡	四日市市伊坂町	3,950	0	42 800	3,150				42 3,950	0	調査終了
2	伊坂城跡	四日市市伊坂町	25,000	0		6,000	2,500			0 8,500	16,500	
3	北山C遺跡	四日市市西大鐘町	22,000	4,000				600		600		事業地内遺跡面積拡大
4	野中遺跡	四日市市北山町	15,500	7,200					4,350 500	4,350 500	13,650	
5	黒土遺跡	四日市市北山町	11,000	11,000			580	380		0 960 0	8,300 0	調査終了
6	北山A遺跡	四日市市北山町	19,000	5,300			950 100	500 3,760	4,130	1,450 7,990	5,710	
7	中野山遺跡	四日市市北山町	43,000				1,530	880 6,400	10,712	2,410 17,112	25,888	
8	肇ヶ崎古墳群	四日市市小牧町	15,000					560 750	9,100	560 9,850	5,150	
9	北山城跡	四日市市北山町	17,500					630	6,426	630 6,426	11,074	
10	居林古墳群	四日市市北山町										北山城跡対象範囲に含まれる。
11	小牧南遺跡	四日市市小牧町	20,300	500				460	800 165	1,260 165	19,635	
12	中野早古遺跡	四日市市中野町	7,000							0 0	7,000	
13	野添御館山古墳	弧野町川北	1,000	1,000					200	200 0	0	調査終了
14	椋ノ木遺跡	弧野町池底	16,500							0 0	16,500	
15	天大保遺跡	弧野町潤田	12,000							0 0	12,000	
16	鈴山遺跡	弧野町音羽	8,000							0 0	8,000	
17	大長遺跡	鈴鹿市大久保町	2,200	2,200					180	180 0	0	調査終了
18	高ノ瀬遺跡	鈴鹿市山本町	33,600	17,200					1,580	1,580 0	16,400	
19	狗子遺跡	鈴鹿市山本町	13,500	13,500					800	800 0	0	調査終了
20	東荒野遺跡	鈴鹿市山本町	4,900	4,900					500	500 0	0	調査終了
21	小社遺跡	鈴鹿市小社町	12,000	7,500				1,030	400 1,573	1,430 1,573	2,927	
22	是福内遺跡	鈴鹿市小岐須町	30,000	12,000				2,300	200 8,500	2,500 8,500	9,500	
年度別調査合計面積(㎡)			332,950	86,300	42 800	0 9,150	3,060 2,600	7,330 10,910	3,160 44,956	15,592 68,416	178,234	

表１　近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

内　容	所在地・会場	開　催　年　月　日	参加人数	備　　考
釜知内遺跡（第２次） 現場公開	鈴鹿市小岐須町	平成24(2012)年８月27日（水）～29日（金）	72名	
釜知内遺跡（第２次） 体験発掘	鈴鹿市小岐須町	平成24(2012)年10月11日（木）	37名	鈴鹿市立椿小学校６年生35名＋引率教員２名
北山Ａ遺跡（第３次）・中野山遺跡（第８・９次）・北山城跡（第２次）現地説明会	四日市市北山町	平成24(2012)年10月13日（土）	250名	
保々地区歴史を語る会 出前講座	保々地区市民センター	平成24(2012)年11月４日（日）	30名	
肇ヶ崎古墳群第３次 現地説明会	四日市市小牧町	平成24(2012)年12月１日（土）	207名	
北星高校 出前講座	県立北星高校	平成25(2013)年１月17日（木）	13名	
北星高校 出前講座	県立北星高校	平成25(2013)年１月20日（日）	20名	

表２　普及公開活動一覧

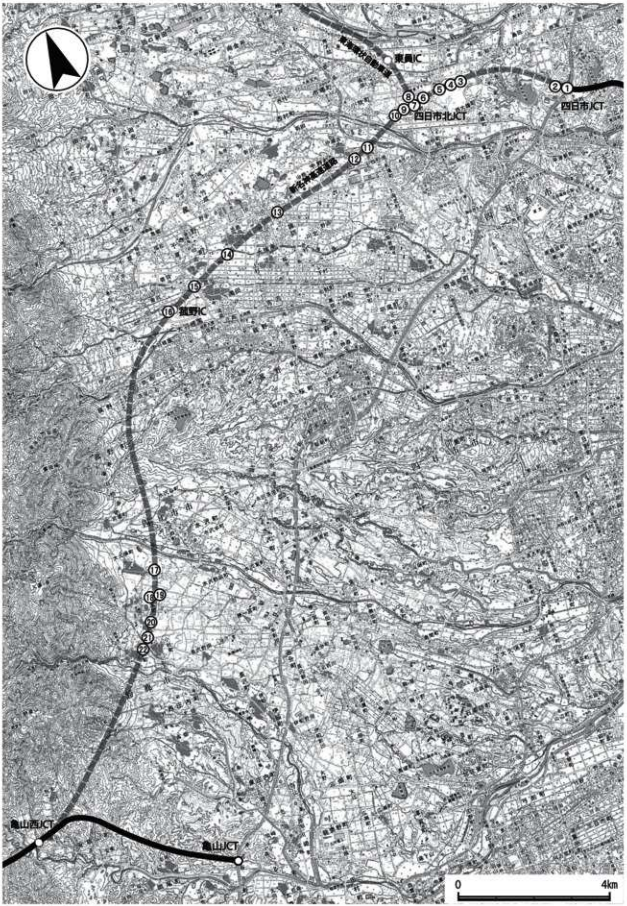


図1　遺跡位置図（1：100,000）

図２　北山Ｃ遺跡調査区位置図（1：2,000）

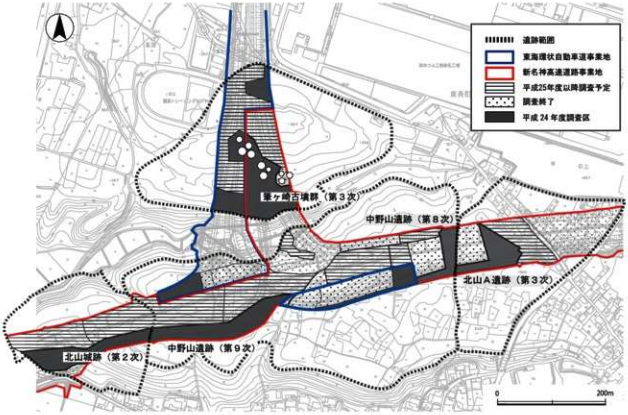


図３　四日市北ＪＣＴ付近調査区位置図（1：7,000）

図４　小社遺跡調査区位置図（1：2,000）

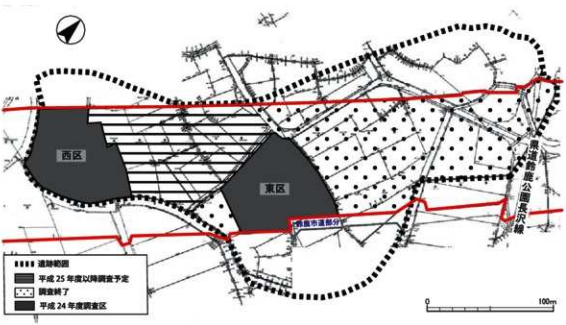


図５　釜垣内遺跡調査区位置図（1：3,000）

写真１　現地説明会（北山城跡）

写真２　体験発掘（椿小学校）

2　北山Ｃ遺跡（第２次）・西山古墳群

１.はじめに

北山Ｃ遺跡は桑名市南部を流れる員弁川南岸に位置し、標高約 60 ｍの台地上、桑名市から四日市市にまたがる広さ約 20,000 ㎡の広大な遺跡である。今回の調査区は、台地の北端、遺跡としても北端部分に位置する。調査区は、西区（2,745 ㎡）と東区（1,605 ㎡）とに分かれる。

なお、今回の調査で発見された古墳は「西山古墳」とし、平成 25 年３月 27 日付教埋第 567 号にて三重県教育委員会あて通知している。

２.西区

西区では、調査区全体で近世から現代にかけてと思われる耕作などに伴う小道や耕作溝、水溜桶跡などの撹乱が多く確認された。反対に遺構の密度はたいへん少なかったが、弥生終末期の溝と古墳周溝を中心とする遺構を検出した。なお遺物の出土は少なかった。

（１）弥生時代終末

調査区やや東よりでＳＤ６を検出したにとどまる。検出時には長さ約 22 ｍ、幅約 0.5 ｍの溝としたが、掘削の結果２基の土抗状に分かれ、長径 1.3 ｍ、短径 0.6 ｍの長円形を呈する一方からＳ字状口縁台付甕がほぼ完形に近い状態で出土した。口縁部が若干下を向いているものの、ほぼ真横に近い状況であった。また底から約 40 ㎝浮いた位置からの出土で、体部上端は検出面とほぼ同じ位置であった。

（２）古墳時代

検出した遺構の大半は古墳の周溝と考えられるものである。５基を確認し、いずれの古墳も盛土部分はすべて削平されており、周溝を残すのみである。周溝からは須恵器が出土し、これにより古墳の造営は５世紀後半であったと考えられる。古墳の形は、西山３号墳（ＳＤ７）が方墳、他の４基が円墳である。規模は、周溝内側で方墳は一辺８ｍ、円墳は大型のもので径 12 ｍ、小型のもので径８ｍである。西山４号墳（ＳＤ 15）・西山５号墳（ＳＤ９）は、周溝のおよそ半分程度を確認したにとどまった。特に西山５号墳（ＳＤ９）は南側部分の検出はできたものの、北側は検出できていない。ＳＤ 12 からＳＤ 11 へかけて谷へ流れ込む流路状の溝と一体となっており、古墳周溝とするに疑問の多いものである。

写真３　調査区全景（西上空より）

写真４　西区全景

写真５　ＳＤ６遺物出土状況（北東から）

次に、各古墳の配置状況にふれる。それぞれの古墳の周溝間の距離は極めて近く、古墳はお互いに近接している。１号墳（SD19）、２号墳（SD８）、３号墳（SD７）の３基は、南西から北東方向に一列に並んだ配列になっているが、それ以外は一定の配列状況の確認はできない。また、空閑地などの存在についての確認もできない。しかし、大小さまざまな大きさの円墳と方墳とが混在する群集墳をなしている。

他にも半円状や方形に巡る溝を多数検出している。前述したように畑境や耕作に関する溝、風倒木跡、近現代の遺物が出土したもの等があり、古墳の周溝と認められなかった。

写真６　１～３号墳（ＳＤ 19・８・７）（西から）

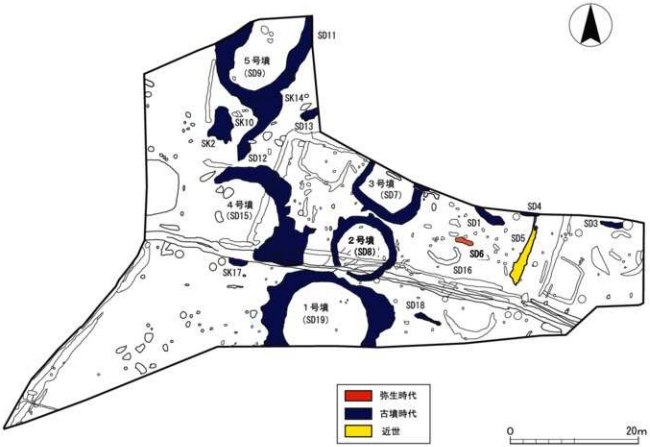


図６　西区遺構配置図（1：600）

2. 東区

東区は西区の東に位置し、遺跡の東端部でもある。西区ほど多くの攪乱はなかったが、近代以降の耕作に伴う溝や水溜桶跡などを確認した。遺構の密度は少なかったが、古墳の周溝より多くの須恵器が出土した。

なお調査の過程で周溝が調査区外へ広がることがわかってきたため、調査区の拡大を行った。

（1）古墳時代

検出した溝状遺構は、古墳の周溝と考えられるものである。5基を確認し、いずれの古墳も盛土部分はすべて削平され、周溝のみを残す。9号墳（SD 52）を除く全ての周溝から須恵器が出土し、これにより古墳の造営は5世紀後半であったと考えられる。9号墳からは2個の土師器椀が完形で出土したが須恵器の出土はなかった。他のものより若干南に離れ、小規模であるものの一連の群集墳を構成するものと思われる。

古墳の形は、10号墳（SD 58）が円墳、その他の4基は方墳である。規模は、周溝内側で円墳は径14m、方墳は一辺8m、小型のものは一辺6mで、円墳の10号墳が最大規模である。

また9号墳（SD 52）を除く他の4基は、周溝間が約1～1.5mであり、古墳は極めて近接している。したがってこれらの古墳は、削平状況や造営時期、群集墳としての形態いずれの点においても西区と同様の状態を呈している。ただし遺物の量については、東区の古墳周溝内から出土した量の方が格段に多い。

8号墳（SD 53） 古墳の規模は、周溝の内側で南北約8.5m、東西約9mを測る。また検出面から溝の最深部までは、4辺とも約35cm、各辺の溝幅は最大値で約1.3mから1.8mを測りほぼ均一である。

遺物のほとんどは、溝の最深部より15cmから20cm浮いた位置からの出土である。また遺物は周溝の北辺を除く3辺からほぼ完形で出土しているが、特に東辺に集中している。なお出土遺物のほとんどが須恵器であるのに対し、西辺では須恵器の甕形土器に加え土師器の壺が出土した。2は百済系土器とされる甕形土器[3]である。瓦質とまでは言えないが、やや焼の甘い須恵器で、円盤状の底部に粘土紐を巻上

写真7　7号墳（SD 55）遺物出土状況（東南から）

写真8　8号墳（SD 53）（北西から）

写真9　9号墳（SD 52）（北西から）

写真10　10号墳（SD 58）（南から）

写真 11　東区全景（拡張前）

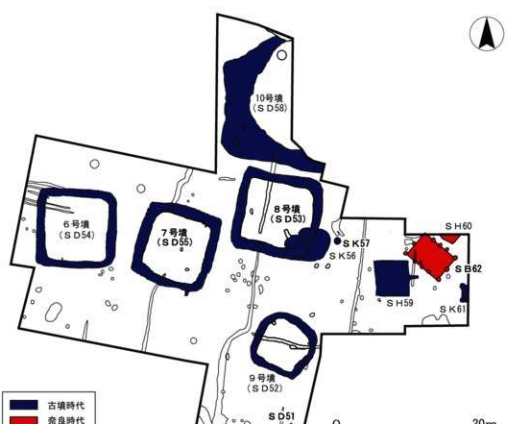


図7　東区遺構配置図（1：500）

西山10号墳（SD58）

西山８号墳（SD53）

須恵器壺

須恵器蓋１

須恵器杯

須恵器鍋

（接合）

須恵器杯

土師器壺

須恵器盌形土器２

SK56

須恵器鍋

須恵器鍋

0　5m

図８　８号墳（ＳＤ 53）平面図（１：100）

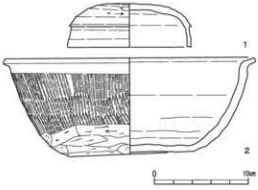


図９　８号墳（ＳＤ 53）出土遺物実測図（１：４）

写真12　８号墳（SD53）盌形土器出土状況（南から）

げて成形し、口縁部は短く外に引出し、強くヨコナデする。体部に並行タタキ、下半のロクロケズリは回転の弱いもので、一部ヘラケズリ状を呈する。1はそれに共伴する須恵器の蓋である。

南辺では、複数の**甕**が出土したが、いずれも底部や口縁を欠くなど完形品はない。ただし、図8にも示したように、南辺と東辺から出土した**甕**が接合でき、同一個体が周溝の隣り合う2辺から出土したことになる。さらに、東辺から出土した壺と北隣の西山10号墳（ＳＤ58）から出土した壺が接合でき、ほぼ完形となった。同一個体の片が隣り合う2つの古墳から出土したことになる。

また、東辺から出土した須恵器・土師器は細片も多く含み、杯や長頸壺などの数点は新しい型式を示す。これらの須恵器は、周溝と重複するＳＫ56からの混入と考えられる。

その他、古墳群の東に竪穴住居1棟（ＳＨ59）を検出した。この遺構は、一辺約4.5ｍの方形で東壁にカマドを持つが、古墳群より時期が降る。

（2）奈良時代

調査区東端から、竪穴建物1棟（ＳＨ60）と掘立柱建物1棟（ＳＢ62）を検出した。ＳＢ62は、4×2の側柱建物でＳＨ60と方向を揃える。ＳＨ60からは、土師器の杯がほぼ完形で出土した。

またこれらの遺構は、周知の埋蔵文化財包蔵地の東際である。遺構の密度や地形から勘案すると、遺跡はさらに東方に広がるものと判断した。そこで平成24年3月11日付教埋第499号にて「周知の埋蔵文化財の範囲変更」を三重県教育長に通知した。

［註］

① 辻川哲朗「近江地域における百済系土器の一様相」『紀要26』公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2013.3

写真13　8号墳（ＳＤ53）出土須恵器蓋

写真14　8号墳（ＳＤ53）出土盌形土器

写真15　ＳＨ59（西から）

写真16　ＳＢ62（南東から）

3　北山A遺跡（第３次）

1. はじめに

北山A遺跡は、中野山遺跡の東側に隣接しており、遺構の内容や地形の連続性などから両者は一連の古代の集落跡として捉えることが適当と考えられる（図３）。平成23年度に行った第２次調査では縄文時代晩期の土器棺１基、古代の掘立柱建物１棟、竪穴住居15棟の他、大型土坑、集石土坑などを検出している。

今回の第３次調査では、昨年度の調査区に隣接した4,130㎡を対象とし、飛鳥～奈良時代の遺構を検出した。

2. 遺構

（1）飛鳥～奈良時代の遺構

掘立柱建物（表３）　古代の掘立柱建物を９棟確認した。これらは調査区東側に集中している。各建物の軸方向は不規則である。

竪穴住居（表４）　古代の竪穴住居８棟を確認した。平面形は方形と長方形の２種類があり、床面積は20㎡を超えるものが多い。ＳＨ204とＳＨ245は他と比べると小型で、ＳＨ204からは砥石、須恵器短頸壺、内面に放射状暗文が施された土師器皿など、ＳＨ245からは志摩式製塩土器などが出土した。

大型土坑（ＳＫ201・202・210ほか）　長さ３m前後、深さ30～40㎝程の土坑10基を確認した。平面形は不整形で、複数が重複しているものや竪穴住居と重複しているものもある。須恵器片・土師器片などが出土した。

写真17　調査区全景（東上空から）

焼成土坑（ＳＫ241）　調査区北側に位置する、長さ20m、幅1.8mの不整形土坑である。床面の半分ほどと土坑の肩口の一部が被熱していた。遺物は出土しなかった。

	建物種別	規模	間数	建物主軸	方位
SB215	総柱	5.4×3.5	3×2	南北	N28° W
SB222	側柱	6.8×4.2	4×2	東西	N36° E
SB223	側柱	6.8×4.5	4×3	南北	N20° E
SB224	側柱	6.7×4.5	3×2	東西	N27° E
SB226	側柱	6.2×4.2	4×3	南北	N14° W
SB237	側柱	7.2×5.0	4×3	東西	N0°
SB242	総柱	4.4×4.0	3×2	南北	N35° E
SB244	側柱	?×3.7	不明×2	南北	N16° E
SB246	側柱	4.3×3.5	3×2	東西	N35° E

表３　古代の掘立柱建物一覧

遺構名	平面形	長さ	幅	カマドの位置
SH204	方形	3.4m	3.2m	東辺
SH208	方形	4.7m	4.7m	東辺
SH221	長方形	5.4m	5.1m	北辺
SH227	方形	5.3m	5.3m	北辺
SH230	長方形	5.5m	4.5m	北辺
SH238	不明	6.0m	不明	東辺
SH245	方形	3.7m	3.6m	東辺
SH247	長方形	5.1m	3.9m	東辺

表４　古代の竪穴住居一覧

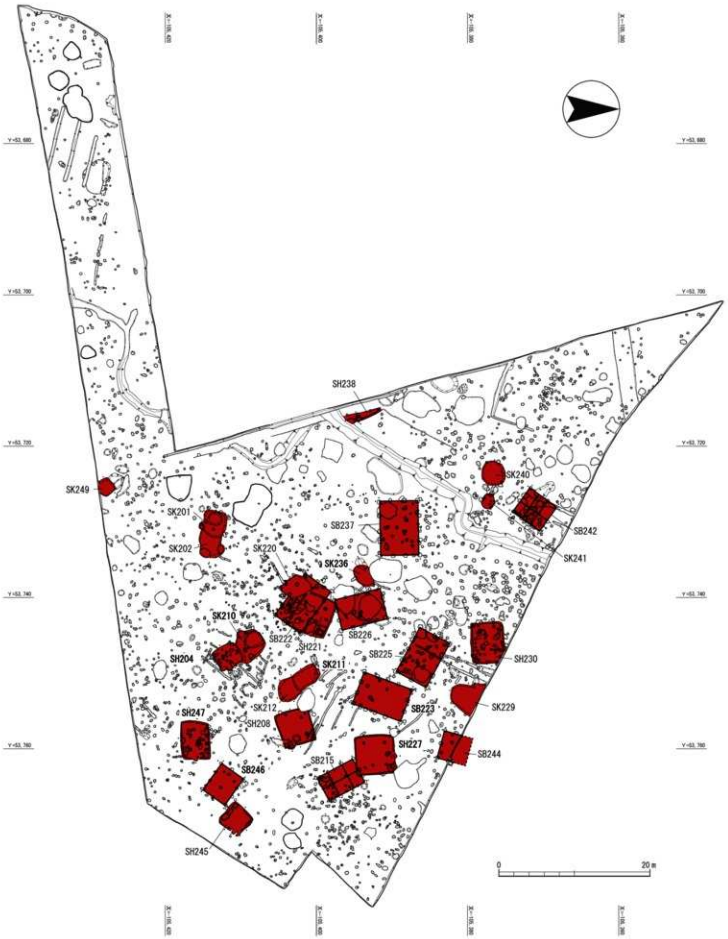


図10　遺構平面図（1：500）

写真 18　ＳＢ 223（南から）

写真 19　ＳＢ 237（西から）

写真 20　ＳＢ 246（西から）

写真 21　ＳＨ 204・ＳＫ 210（南から）

写真 22　ＳＨ 245（西から）

写真 23　ＳＨ 227（南から）

写真 24　ＳＫ 201・202（東から）

写真 25　ＳＫ 241（東から）

4　中野山遺跡（第８次）

１.はじめに

中野山遺跡は、四日市市北山町に所在する。当地は近畿自動車道名古屋神戸線（新名神高速道路）から東海環状自動車道が分岐する四日市北JCT部分にあたるため、調査は新名神調査区と東海環状調査区に分けて行っている。第８次調査区は遺跡の最も東側に位置し、北山Ａ遺跡に隣接している。

２.遺構

（１）縄文時代の遺構

煙道付炉穴　炉穴３基を調査区北側で確認した。前年度までの調査の54基（第３次15基、第４次19基・第５次20基）と合わせて、中野山遺跡では57基の炉穴を確認した。いずれの炉穴も、中野山遺跡の北にある小規模な谷の付近に集中しており、調査区南側に集中する古代の遺構分布とは対照的である。３基は近接しているが平面形に違いがあり、最大のＳＦ1203（写真26）は全長1.7ｍ、最大幅0.4ｍで細長く、最小のＳＦ1205は全長が短く楕円形を呈している。こうした形態の差は炉穴の時期差を反映している可能性がある。いずれの炉穴も地山の粘質土が赤変硬化し、被熱層が形成されている。炉穴の主軸方位は東西を指向している。

写真26　ＳＦ1203（東から）

（２）古代（飛鳥～奈良）時代の遺構

掘立柱建物　５棟を確認した。このうち、ＳＢ1201（写真27）の１棟だけが調査区北側にある。他は調査区南側（写真28）に集中しており、古代の遺構密度も高い。方位は一定ではなく、ＳＢ1201は他の４棟と比べて、かなり違う方位をとっている。

	建物種別	規模	間数	建物主軸	方位	備考
SB1201	総柱	4.2×4.1	3×2	南北	N43° W	
SB1222	側柱	7.9×5.7	4×3	東西	N10° W	
SB1226	総柱	？×2.6	2×2	南北	N４° E	南半は後乱溝で消失
SB1228	側柱	5.4×3.7	3×2	東西	N６° W	
SB1232	側柱	5.0×3.2	3×2	東西	N８° W	

表５　古代の掘立柱建物一覧

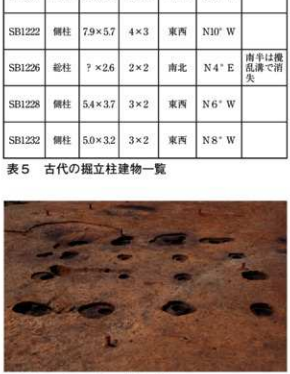


写真27　ＳＢ1201（南から）

写真28　調査区南側（西から）

写真 29　調査区全景（上空から）

図 11　遺構平面図（1：500）

竪穴住居（写真30）　7基すべてを古代の遺構密度が高い調査区南側で確認した。削平（SH1209・1213）、南半が調査区外（SH1218・1219・1233）、攪乱溝（SH1220）のため、遺構の状態が悪く、住居内の設備、平面形、法量等は判然としないものが多い。カマドの位置が確認できた4基は、すべて東辺あるいは北辺であった。

大型土坑（写真31）　長さ9ｍ以上、幅7.6ｍで、西側は攪乱溝で切られている。3基の土坑が重複しており、切り合い関係によりＳＫ1214・1215・1216の順で新しい。多くの土師器片や須恵器片が出土した。

遺構名	平面形	法量(m)		カマドの位置	備考
		長	幅		
SH1209	長方形？	3.8？	3.2？	東辺	周溝は西辺に残存
SH1213	不明	4.5	不明	北辺	西辺の周溝は消失
SH1218	不明	3.0	不明	不明	南半は調査区外
SH1219	不明	4.8	不明	不明	南半は調査区外
SH1220	不明	3.9	不明	東辺	南半は攪乱溝で消失
SH1223	方形	5.3	5.0	東辺	
SH1233	不明	不明	不明	不明	南半は調査区外

表6　古代の竪穴住居一覧

写真30　ＳＨ1223（北西から）

焼成土坑ＳＦ1212（写真32）　土師器焼成坑の可能性がある。西側をＳＫ1211によって切られているため平面形は判然としないが、台形もしくは不整形の土坑で、長軸は2.3ｍ以上、短軸は1.8ｍである。土師器の小片が数多く出土したが、須恵器の混入があったので、焼成坑の廃絶の後、投棄された可能性がある。

3．まとめ

今回の調査では、縄文時代の炉穴と掘立柱建物や竪穴住居を中心とする古代の遺構を確認した。古代の遺構は調査区の南側に偏在しており、さらに調査区の南に遺構が広がっている可能性が高い。焼成土坑は今後の研究によって、当該地域の生産活動の具体像を明らかにしていく手がかりが得られることを期待したい。

写真31　ＳＫ1214・1215・1216（北から）

写真32　ＳＦ1212

5　中野山遺跡（第９次）

中野山遺跡は朝明川中流北岸の台地上に位置する。第９次調査は、遺跡南西部の7,700㎡を対象としたものである（図３）。過年度の調査（第１次から第６次）で、縄文時代から奈良時代までの遺構を確認しており、今回の調査区でも同時代遺構の存在が予想されていた。調査の結果、現地表下約0.4ｍで地山に達し、当該面上で縄文時代から奈良時代の遺構を検出した。

（１）縄文時代

東区で４基の袋状土坑（ＳＫ1310・ＳＫ1311・ＳＫ1312・ＳＫ1336）を検出した。

ＳＫ1312（写真33・図12）　土坑の上部は削平されて本来の深さは不明である。残存部の径は0.85ｍ、深さは0.4ｍである。底面から約0.1ｍ上で最大径0.96ｍとなり、上部にいくにつれてすぼまる。本来の上半部は、フラスコ型または鼓型を呈していたと推定される。上半部から土が流れ落ち、埋土１が堆積されたと仮定すると、堆積範囲と同じ径約0.8ｍまですぼまる形状であったと考えられる。埋土上層４から下層３・１にかけて縄文土器片が出土した。土坑底部に被熱跡はみられない。

出土土器は３個体の破片で、中期後葉頃と推定される。小型の平底片を確認したが、全形は不明である。条痕調整の破片が多いが文様は認められず、厚さ５㎜程で砂粒を多く含み、褐橙色をしている。口縁部小片も微量に確認した。

袋状土坑の類例は管見にして知らない。朝明川流域における縄文時代の生業を知る上で、本遺構の存在は貴重な資料となろう。

写真33　ＳＫ1312（東から）

写真34　調査区北東部（北東から）

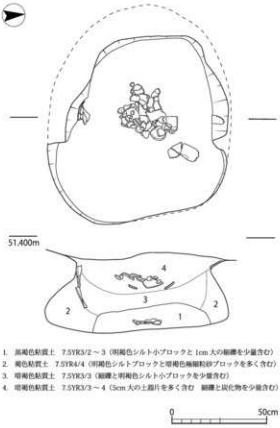


図12　ＳＫ1312実測図（１：20）

図 13　遺構平面図（1：1,000）

（2）弥生時代

東区西部の北壁で、方形竪穴１棟を確認した。

ＳＨ 1331（写真 35） 東西 1.9 m以上、南北 4.8 m の矩形を呈する。西側は調査区外に及ぶため規模は確定できない。柱穴は検出されないが、幅 0.2 mの周溝と東壁中央付近で貯蔵穴を確認した。床面直上で、受口甕の口縁部片を検出した。中期後葉から後期前葉と推定される。

（3）古墳時代

西区南西部の南壁で竪穴住居１棟を確認した。

ＳＨ 1305（写真 36） 東西 5.4 m、南北 2.0 m以上の矩形を呈する。南側は調査区外に及ぶため規模は確定できない。幅約 0.1 mの周溝と、北面の主柱穴（柱間 2.5 m）を検出した。床面直上で古式土師器片を微量に確認した。

（4）飛鳥・奈良時代

竪穴住居８棟と掘立柱建物７棟を確認した（表７・８）。竪穴住居はすべて東区で確認した。平面形は方形もしくは長方形を呈する。掘立柱建物は中区で１棟、東区で６棟を検出した。総柱建物と側柱建物の双方が認められた。いずれも遺構は調査区北東部に集中しており、集落はさらに北東部へ広がると予想される（写真 34）。

写真 35　ＳＨ 1331（西から）

写真 36　ＳＨ 1305（北西から）

ＳＨ 1318　東西 3.7 m、南北 3.9 mの方形を呈し北壁中央にカマドをもつ。カマド埋土から土師器甕の上半部が正立で出土した（写真 37）。径約 30cm の主柱穴を４基と南東隅に貯蔵穴を検出した。

ＳＨ 1320（写真 38）　東西 5.4 m、南北 4.9 mの方形を呈し、北と東に 0.6 mずつ拡張した周溝が認められる。西面の主柱穴を確認した。柱間は、南北 2.7 mである。床面直上で須恵器杯身（口縁部３／５残存）を検出した（図 15）。

遺構名	時代	平面形	規模（m）		備考
			東西	南北	
SH1305	古墳	矩形	5.4	－	北半分のみ検出
SH1313	飛鳥	方形	5.4	5.1	
SH1318	飛鳥	方形	3.7	3.9	
SH1319	飛鳥	長方形	4.2	2.6	SH1318に切られる
SH1320	飛鳥	方形	5.4	4.9	北・東に拡張
SH1321	飛鳥	方形	4.6	4.6	
SH1322	飛鳥	方形	4.3	－	北端は調査区外 周溝から硫石出土
SH1327	飛鳥	矩形	－	－	一部のみ検出 床面より下層に SK1336を検出
SH1331	弥生	矩形	－	4.8	南半分のみ検出
SH1333	飛鳥	方形	6.1	6.1	中央部の床面は削平されている

表７　竪穴住居一覧

遺構名	建物種別	棟方向	規模（m）	尺数・間数（桁行×梁行）
SB1309	側柱	E4° N	9.0×3.0～	6尺×5間 × 5尺×2間～
SB1314	総柱？	N11° E	2.7～×	4.5尺×2間～ ×
SB1317	側柱	E42° S	9.0×4.5	6尺×5間 × 7.5尺×2間
SB1324	総柱	E38° N	4.05×3.9	4.5尺×3間 × 6.5尺×2間
SB1326	側柱	E30° S	5.4～×3.0～	6尺×3間～ × 5尺×2間～
SB1328	側柱	E16° N	6.0×4.5	5尺×4間 × 5尺×3間（東） 7尺＋8尺（西）
SB1332	総柱	N 0°	4.2×3.6	7尺×2間 × 5尺+7尺

表８　掘立柱建物一覧

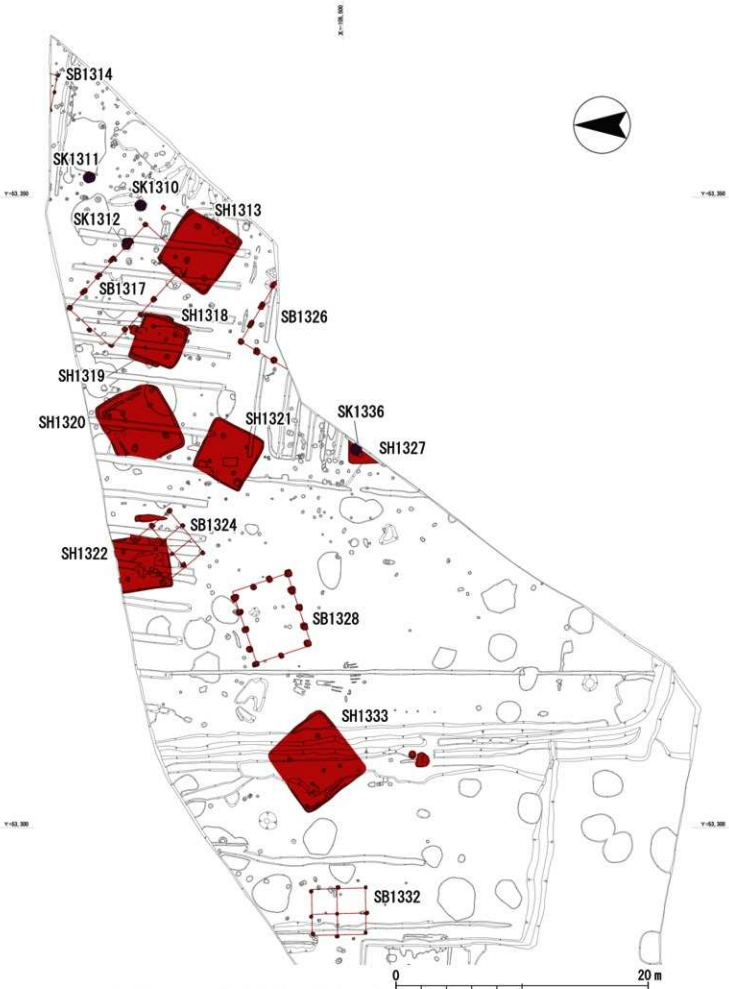


図 14　調査区東部　縄文～飛鳥・奈良時代の遺構（1：300）

ＳＨ 1322　東西 4.3 m、南北 4.1 m以上の方形を呈する。径約 30cm の 4 主柱穴が検出された。柱間は東西 2.2 m、南北 2.6 m である。床面直上から須恵器杯蓋（口縁部３／４残存）（図 15）、周溝から砥石（長さ 10.3cm）が出土した。

ＳＢ 1309（写真 39）　中区中央部南壁に位置する。東西約９m を測り、桁行５間、梁行２間以上の側柱建物である。南側は調査区外に延びていくため、規模は確定できない。柱掘方は一辺約 45cm ～ 50cm の方形を呈し、16cm ～ 18cm の柱痕跡が認められた。柱間寸法は桁間が６尺、梁間が５尺の等間である。東側の柱穴は後世の削平や攪乱を受けたのか、確認されなかった。遺物は検出していない。

ＳＢ 1328（写真 40）　東区中央部に位置する。東西６m、南北 4.5 m を測る側柱建物であり、東で北偏 16° の東西棟である。桁行は両側とも４間であるが、梁行は東側３間と西側２間である。柱間寸法は桁間が５尺等間、梁間は東側が５尺等間で西側が７尺＋８尺となる。柱穴は約 40cm ～ 50cm の隅丸方形を呈し、２穴の重複が見られるものもある。建替えが起因すると推定される。遺物は検出していない。

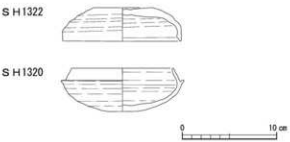


図 15　竪穴住居出土須恵器実測図（１：４）

写真 37　ＳＨ 1318 カマド出土土師器（南から）

写真 39　ＳＢ 1309（西から）

写真 38　ＳＨ 1320（南から）

写真 40　ＳＢ 1328（東から）

6　筆ヶ崎古墳群（第３次）

１.はじめに

筆ヶ崎古墳群は、四日市市小牧町字筆ヶ先に所在する[1]。古墳群は、朝明川と員弁川に挟まれた南向きの台地緩斜面に築造されている。古墳群の存在は以前から知られており、８基の古墳が確認されていた[2]が、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設に伴い、古墳の現況確認を行った結果、新たに２基、古墳が存在することが判明した。

平成23年度に750㎡の範囲について第２次調査を実施したところ、横穴式石室を持つ古墳２基と奈良時代の竪穴住居などが確認された。その中の竪穴住居ＳＨ２の床面で鍛冶炉を２基検出した[3]。このことは、古代において、筆ヶ崎古墳群周辺で鉄製品の加工が行われていたことを意味する。

第３次調査は６基の古墳ならびに古墳群周辺の調査を9,100㎡の範囲について行った。各古墳とともに、古墳周辺の集落の性格を明らかにすることを念頭に置きながら、調査を進めた。

２.古墳

今回調査した古墳群は、２つの小群から構成されている（図16）。１群は調査区北西にあり、５・６・７・11号墳で構成されている。もう１群は調査区の中央に３・４・10号墳で構成されている（写真41）。

調査した古墳はすべて横穴式石室を持ち、石室は南側に開口する。ただ、いずれの古墳も大きく盗掘を受けており、多くの石材は抜き取られていた。石室の残存状況が良くない状態であったので、今回の調査では残存している壁体と石材の抜き取り痕など

写真41　３号墳・４号墳・10号墳（南から）

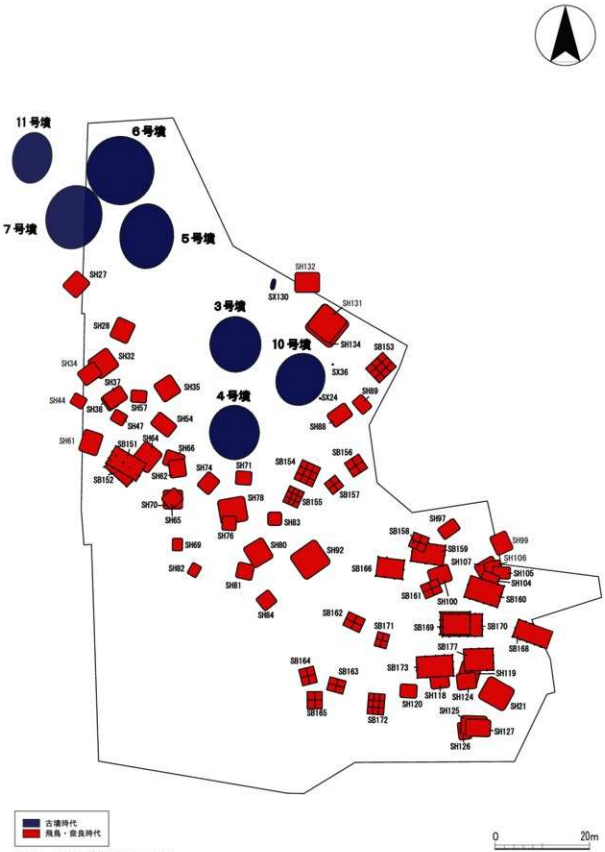


図 16　遺構配置図（1：800）

を手がかりにして石室の規模を確認した。

壁体に用いられている石材は、石材鑑定[8]の結果、砂岩が主体と判明した。また花崗岩・湖東流紋岩・チャート・ホルンフェルス・スカルンなどの使用も確認できた。これらの石材は、鈴鹿山系にみられること、角のとれた形状であることから、筆ヶ崎古墳群の石室は周辺河川の川原石を用いて築造されたと考えられる。

（1）３号墳

３号墳は調査区北西にある小群のうち最も北に築造されている古墳である（図16）。直径約12.0 mの円墳である。

横穴式石室　３号墳の石室は大きく破壊されており、石材は西側壁と奥壁に一部が残存しているのみであった。石室の規模は残存していた奥壁と西側壁、石材の抜き取り痕から考えると、長さ約5.0 m、幅約1.2 mとみられる。また、床面に石室主軸と直交する方向で石列を２列確認した。石列は棺台に使われていたと思われる。

周溝　周溝は浅く不整形である。南西部分についてはやや不明瞭ではあるが、石室入口付近まで巡ったと思われる。周溝の幅は1.5 ～ 2.3 m、深さは15cmほどである。

出土遺物　石室の床面から出土した遺物は少なく、須恵器の無蓋高杯と須恵器小片が出土しているのみである。須恵器の無蓋高杯は二段三方向の透孔を持つものである。床面直上から出土していることから、石室内に副葬されていたと思われる。土器の形態からこの古墳は７世紀前半から半ばに築造されたと考えられる。

（2）４号墳

４号墳は、３号墳の南に築造されている古墳である。直径約11.3 mの円墳である。

横穴式石室　４号墳の石室も大きく破壊を受けていたが、石室の規模は石材の抜き取り痕と東西側壁の残存状況により、長さ約5.4 m、幅約1.0 mと考えられる。なお、石室入口には立柱石を思わせる縦長の石材が据えられていた。

周溝　周溝は墳丘を巡り、南側の石室入口付近で途切れる。北側から東側にかけては幅2.8 ～ 3.0 m、深さ30cm程度であるが、西側はそれより狭く、浅い。

出土遺物　石室の奥壁付近の床面より、須恵器の無蓋高杯と平瓶、**鼓**、杯蓋が１点ずつ出土した。いずれもほぼ完形で出土している（写真43）。床面直上から出土しているので、この古墳に伴う遺物と考えてよいだろう。須恵器の形態からみて、４号墳は７世紀前半から半ばに築造されたものと考えられる。このほか、４号墳では耳環が２点出土している。１点は石室中央の床面直上から出土したものであり、損傷の少ない形で出土した（裏表紙）。直径2.5 cmの正円に近い形状で、断面は楕円形であり７世紀前半の様相を呈している[9]。もう１点の耳環は盗掘坑の埋土から出土している。

（3）５号墳

５号墳は調査区中央にある小群の南東側に位置する（図16）。直径約12.9 mの円墳である。

横穴式石室　５号墳の石室も大きく破壊を受けており、西側壁は倒壊した状態で検出された。石材が残存していたのは、東側壁のごく一部のみであった。石室の規模は、石材の抜き取り痕と東側壁の残存状

写真42　３号墳石室（南から）

写真43　４号墳石室遺物出土状況（東から）

写真 44　4号墳出土須恵器

況から、長さ約 5.8 m、幅約 1.1 m と考えられる。

周溝　周溝は墳丘を巡り、南側の石室入口付近で途切れる。周溝の幅は平均すると 1.0 m程度であるが、幅は一定でない。深さは概ね 10 cmであるが、東側は部分的に深い。

出土遺物　石室中央付近の床面より須恵器の杯蓋1点・杯身2点・耳環1点、奥壁付近の床面から須恵器の高杯脚が出土している。また、倒壊した壁の下から須恵器の杯蓋などと土師器の甕が出土した。いずれも5号墳に伴うと考えられる。その他に性格不明ながら、石室入口付近の小穴で5号墳出土遺物と同時期の須恵器高杯・台付椀が出土した。これらの出土遺物から、5号墳は7世紀前半から半ばに築造されたものと推測できる。

（4）6号墳

6号墳は5号墳の北西側に位置する。直径約 13.8 mの円墳である。

横穴式石室　6号墳の石室も大きく破壊を受けており、石材については西側壁に1石残存しているのみであった。規模については石材抜き取り痕の状況から、長さ約 5.7 m、幅約 1.3 m と考えられる。

周溝　周溝は、幅 2.5 ～ 3.0 mで墳丘を巡り、南の石室入口付近で途切れる。深さは概ね 30cm あったが、北側が若干浅い。

出土遺物　横穴式石室の中央付近の床面直上より青銅製の釵子が出土した。二本足のU字形を呈し、大阪府一須賀Ⅰ－19号墳に類例がみられる[8]。釵子は渡来系集団に深く関連する遺物との指摘がある[9]。この点から、埋葬された人物と渡来人との間に何らかの関連があった可能性が考えられる。その他、石室入口付近において、床面の 15 ～ 20cm 上から須恵器の平瓶が、盗掘坑の埋土からは耳環が出土している。耳環の形状は断面が正円に近い。耳環の編年[8]にしたがえば、古墳の築造時期は6世紀末頃にさかのぼる可能性があろう。

（5）7号墳

7号墳は5号墳の西側に位置する。事業地内には東裾部のみが入っており、発掘調査もこの部分が対象となった[3]。調査範囲が狭いため、周溝と墳丘の一部を検出したにとどまる。調査区内では埋葬施設に関する情報は得ることができなかった。

（6）10号墳

10号墳は3号墳の東に位置する。直径約 11.7 mの円墳である。

横穴式石室　10号墳の石室も大きく破壊を受けており、壁面石材と思われるものは石室の西側壁に1石、東側壁に2石残存しているだけであった。規模については、石材の抜き取り痕も勘案すると、長さ約 5.2 m、幅約 1.1 m と考えられる。その他、石室の床面約 10cm 上で直径約 15cm の礫の広がりを検出した。礫の広がりは石室の奥壁付近から石室中央付近にかけて南北約 2.2 m、東西約 0.8 mにわたっている。石室の礫床として用いられていたのであろう。石材のほとんどが砂岩であることから、これらの礫も周辺河川の川原石を利用したものと思われる。

周溝　周溝は墳丘を巡り、南側の石室入口付近で途切れる。周溝の東側の幅は約 0.8 m と狭く、北側と西側は広くなっている。全体的に周溝は浅いが、標高の低い南側で深くなっている。

出土遺物　羨道から須恵器の杯身・甕、土師器の鍋あるいは甑と考えられる把手2点が出土している。これらを古墳に伴う遺物と考えるならば、10号墳は7世紀半ば頃に築造されたものと考えられる。

3. 古代の遺構

昨年度の第2次調査において、奈良時代の竪穴住居ＳＨ２が検出された。この竪穴住居は鉄製品を加工していた工房的な機能を持っており、筆ヶ崎古墳群周辺集落の性格を考えるうえで重要な成果であった。

今年度の調査では、この成果をふまえて古墳周辺

について調査を行ったところ、竪穴住居46棟、掘立柱建物23棟を検出し、集落が広範囲に及ぶことが明らかになった。

（1）竪穴住居

竪穴住居は46棟を検出した。台地南斜面に立地するため南側部分が流出し、完全な形で検出することができなかったものもあるが、残存している部分から多くの成果を得ることができた。

竪穴住居は、古墳を避けるように分布し、集落を形成している。古墳との重複はない。住居は方形の平面形で、カマドを有しているものを多く検出した（写真45）。また、多くの住居で壁周溝を検出したほか、貯蔵穴や柱穴を検出できたものもあった。大きさは、ＳＨ131、ＳＨ134のように１辺６ｍを超える大型のものもあるが、概ね４～５ｍ四方のものであった。

遺物については、土師器の長胴甕や須恵器などがカマド付近を中心に出土している。土器と竪穴住居の形状から、これらは飛鳥時代から奈良時代の遺構といえる。また、漆状有機物の付着した須恵器杯（写真46）、知多式製塩土器、土錘など、当時の生活の様子を知るうえで特徴的な遺物が出土した。加えて鉄製品や砥石、鉄滓が出土した。

（2）掘立柱建物

掘立柱建物で明確に確認できたものは23棟である。掘立柱建物に伴う遺物は少なく小片がほとんどである。したがって時代の確定は難しいが、出土している土器から飛鳥・奈良時代の遺構と考えてよいだろう。

23棟のうち総柱建物は13棟であり、いくつかのまとまりを成して建てられている（図16）。集落の

写真45　ＳＨ65カマド（南から）

写真46　漆状有機物の付着した須恵器杯

中に存在する建物の数としてはかなり多いといえる。これらの総柱建物は竪穴住居や側柱建物に個々に対応する様子がないことから、集落で共有している貯蔵施設として使われていた可能性が考えられる。とするならば、その数から集落の生産活動が大規模であったことが推測される。

側柱建物は10棟検出した。このうち２棟については４号墳の西側に重複して位置するが、残りのＳ棟は調査区南東に集中している（図16）。この中でＳＢ170は梁行３間×桁行５間、柱間は梁行約2.4ｍ、桁行約22ｍの比較的規模の大きな建物である。なお、ＳＢ170は遺構の重複関係から、飛鳥・奈良時代の遺物を含む土坑よりも新しい。したがってＳＢ170は集落存続期間のなかで後出する建物といえる。

個々の住居に伴わない総柱建物と比較的規模の大きな側柱建物の存在は興味深い発見である。集落共有の貯蔵施設が存在したことや集落に有力者が存在した可能性を検討すべきであろう。

（3）その他の遺構

ＳＸ24　10号墳南東で検出した。直径約40cmの平面円形で、深さ約15cmの土壙の中に土師器の長胴甕が口縁部を北東に向け横位に置かれていた。上半分は破損していたが、土器全体が土坑に隙間なく収まる形で据えられていた。出土状況から、土器棺として使用されたものと考えられる。なお、骨片や副葬品は見られなかった。

ＳＸ36　10号墳東で検出した。直径40cmほどの土壙と思われるが、根による攪乱が著しく、遺存状況

は良好でない。2個体の土師器の長胴甕が出土した。2個体とも口縁部は残存しており、甕はそれぞれ横位に置かれ、口縁を合わせた形で据えられていたことが推測できた。こうした出土状況からＳＸ36は合口の土器棺墓と考えられる。

ＳＸ139　3号墳北で検出した。主軸を南北方向にとり、隅丸長方形を呈する。規模は長さ約2.3ｍ、幅約0.7ｍ、深さ約20cmである。底面には直径20～30cmの石が敷かれていた。遺物として南隅で土師器の椀が2点出土した。石の上に重なる形で出土しており、この道構に伴うものであろう。これらの状況をふまえると土壙墓の可能性が考えられる。土器の特徴から時代を考えると、ＳＸ139は7世紀の道構と思われる。

4.まとめ

今回の調査では、5基の古墳すべてが横穴式石室を持ち、6世紀末から7世紀半ばに築造されたことが判明した。渡来系集団との関わりが指摘される叙子が出土したことは特筆に値しよう。

古墳周辺の調査では飛鳥・奈良時代の集落を検出した。集落の住居や土坑などから鉄滓や鉄製品、砥石の出土を確認できたことは、昨年度の鍛冶炉の検出とあわせて、この集落で鉄製品の加工が継続的におこなわれていたことを裏付けるものとなった。竪穴住居と掘立柱建物の共存関係とその時期的変化、集落内の階層差などは今後の課題となる。これらを明らかにすることで集落の性格や鉄製品加工のあり方に対する評価を深めることができよう。筆ヶ崎古墳群の周辺地域での鉄製品加工の可能性はこれまでも指摘されている[⑨]が、今年度の調査結果は具体的なあり方の解明に大きく寄与するものとなるだろう。

[註]

① 字名は「筆ヶ先」であるが、周知の埋蔵文化財包蔵地としては従来より「筆ヶ崎古墳群」となっていたため、調査においてもこれを踏襲した。

② 四日市市『四日市市史』第2巻史料編考古Ⅰ　1988

③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012

④ 三重県立博物館　津村善博氏の指導による。

⑤ 松本百合子「耳飾」『古墳時代の研究』第8巻　雄山閣出版　1991
　菱田哲郎「7世紀の古墳にみられる朝鮮系文物」『古代日韓交流の考古学的研究』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(1)）研究成果報告書　2003

⑥ 大阪府教育委員会『一須賀古墳群Ⅰ支群発掘調査概要』1993

⑦ 関川尚功「古墳文化の渡来人―大和・河内を中心に―」『橿原考古学研究所論集』第9　吉川弘文館 1988
　花田勝広「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』第39巻第4号　考古学研究会　1993
　花田勝広「古墳時代の畿内渡来人―解明への模索―」『日本考古学協会2003年度滋賀大会研究発表資料』日本考古学協会2003年度滋賀大会実行委員会

⑧ 前掲註⑤に同じ

⑨ 7号墳・11号墳については、東海環状自動車道建設事業に伴い平成24年度に「筆ヶ崎古墳第4次調査」を行っている。

⑩ 四日市遺跡調査会『北山Ｃ遺跡』1988

写真47　SB169・170周辺（南東から）

7　北山城跡（第２次）

１.はじめに

北山城は朝明川左岸の台地上に位置する城館である。朝明川流域には桑名と近江を結ぶ主要街道である八風街道が通り、中世後期には街道沿いに伊坂城や市場城といった城館が点在していた。この北山城については同時代の文献や資料に関する記載はないものの、市場城等との縄張りの類似性や立地などから、中世後期の城館と考えられている①。

さらに時代をさかのぼると、朝明川中下流域では縄文時代から人々の生活が行われた痕跡がみられ、丘陵上を中心に多くの集落が存在していたことが明らかになっている。

この北山城跡周辺でも北山Ａ遺跡（縄文時代の土器棺墓・古代の集落跡）、中野山遺跡（縄文時代・奈良時代の集落）、小牧北遺跡（縄文時代晩期と弥生時代後期の土器棺墓・方形周溝墓および奈良時代の集落跡、中世の遺構）、筆ヶ崎古墳群（古墳と古代の集落跡）が存在するほか、北山城の城郭部に居林古墳群が存在するなど、縄文時代から中世に至るまでの遺跡が数多く存在している。

こうしたことから、この北山城跡でも縄文時代から中世後期までの幅広い時期の遺構・遺物が存在するものと考えられるなか、平成23年度の調査では、古墳～奈良時代の遺構・遺物が確認された。

今回の調査では主郭部から南へ50ｍほどはずれた台地南端から斜面下にかけて6,426㎡の調査をおこなった。なお、調査前の現状については林となっており、台地下に現在の集落や水田が広がっている。

写真48　調査区全景（上空東から）

2．遺構

（1）古墳時代以前の遺構

竪穴住居38棟と溝２条を確認したが、掘立柱建物や墓域などは確認できなかった。

竪穴住居の特徴　隅丸方形のものが多い。大きさが明らかなものの中で最大のものは7.1 × 6.9 m（ＳＨ244）、最小のものは3.8 × 3.5 m（ＳＨ226）であるが、４～６m四方のものが主体となっている。

今回発見された住居跡のうち15棟で主柱穴および南側に貯蔵穴を有することが確認されたが、主柱穴、貯蔵穴ともに確認されていないものも存在する。

また、床面に焼土が認められるものがあり、地床炉の痕跡と考えられる。地床炉は17棟で確認された。こうした地床炉の痕跡の有無に関わらず、一部の被熱した砂岩質の河原石が出土した住居跡も多く、石置炉が普遍的に存在したものと考えられる。なお、今回発見された住居でカマドを伴うものはなかった。

さらに、今回発見した中では大型の部類に入る竪穴住居２棟（ＳＨ228・ＳＨ244）で排水溝を確認した。

分布状況　弥生時代後期の住居が台地上・斜面下のどちらにも分布するのに対し、それ以降の弥生時代末から古墳時代初頭にかけてのものは台地上のみの分布となっている。後者は台地南端の斜面付近まで作られており（ＳＨ244・ＳＨ250等）、斜面のピットより出土した弥生土器や土師器も台地上の集落から流れてきたものと考えられる。なお、斜面下の竪穴住居跡は傾斜により南側の部分が流出している。

調査区外に広がる竪穴住居跡も複数確認されていることから、集落の範囲がさらに広がることは確実である。

重複・拡張のみられる住居　複数の住居跡において入れ子状に重複している様子が見られた。重複の例としてＳＨ209では床面からＳＨ236が検出され、そのＳＨ236の範囲において炭化木材が多く出土して

写真49　調査区東部遺構配置状況

写真50　SH209・236遺物・炭化物出土状況（南から）

写真51　SK261完掘状況・SK236石組（南から）

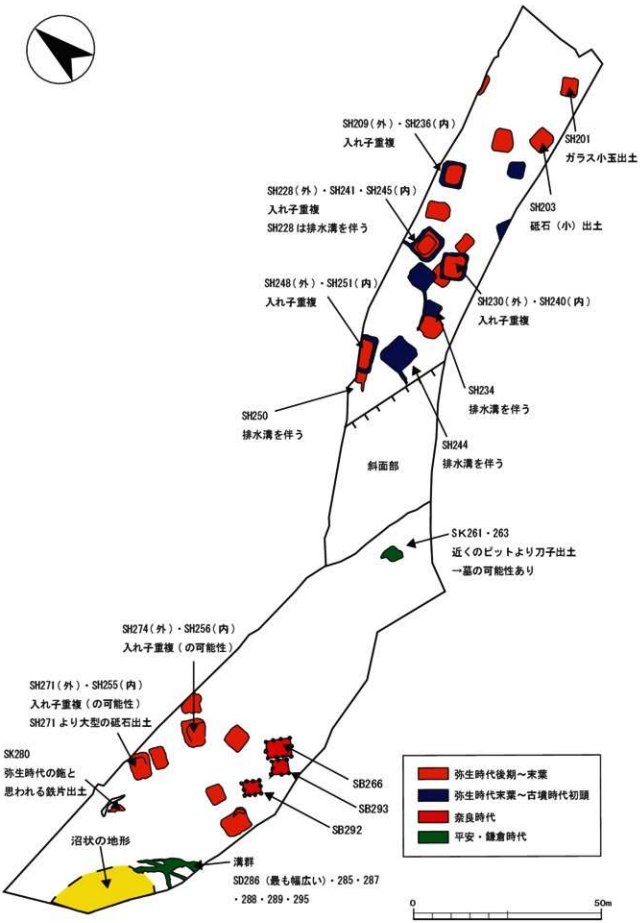


図 17　遺構配置図（1：1,000）

いる。さらにＳＨ 236 の土層を観察したところ、部分的にブロック状に地山が認められた。このことからＳＨ 236 が何らかの理由で焼失した後に、周辺を浅く掘り、その際の掘削土を部分的に使用してＳＨ 236 を埋め、ＳＨ 209 を建てた可能性が考えられる。

また、ＳＨ 228・ＳＨ 241・ＳＨ 245 の住居跡では同じ床面のレベルで３棟の壁周溝が検出され、その観察から同一の場所に３棟の竪穴住居がその規模を拡大しながら建て替えられたものと考えられる。こうした状態は斜面下の竪穴住居跡（ＳＨ 274・ＳＨ 256 とＳＨ 271・ＳＨ 255 の重複）でもみられ、同じ場所に住居を建て続けるような風習が存在した可能性も考えられる。

（２）奈良時代の遺構

台地下の斜面地において掘立柱建物３棟（ＳＢ 266・ＳＢ 292・ＳＢ 293）を確認した。大きさは 6.3 × 4.5 m（ＳＢ 266）・4.5 × 3.9m（ＳＢ 292）・4.5 × 39m（ＳＢ 293）とそれぞれ異なるものの、棟の方向は３棟とも同じである。遺構の時期を示す遺物としてＳＢ 266 の柱穴より奈良時代の須恵器杯蓋が出

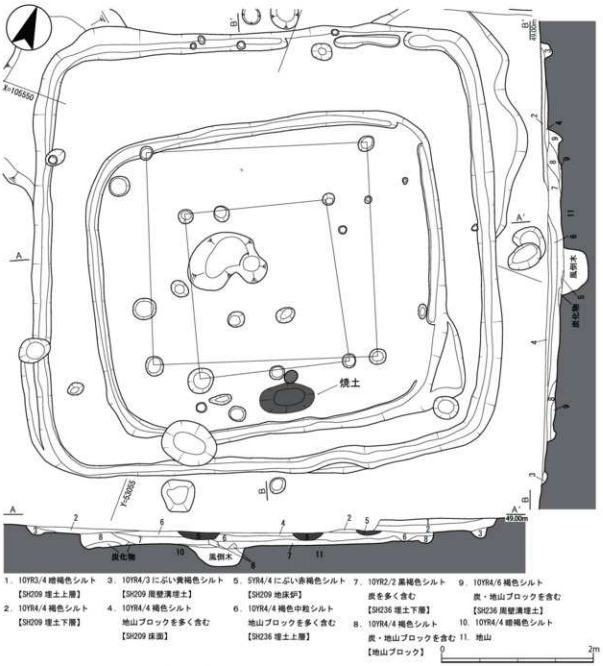


図 18　ＳＨ 209・236 実測図（１：50）

土している。

（3）平安時代の遺構

斜面下で平安時代の土坑（ＳＫ 261・ＳＫ 263）を確認した。どちらの土坑からも遺物として灰釉陶器、須恵器が出土している。ＳＫ 261 は底面の一部が階段状となっており、また、ＳＫ 263 の底部には石組が遺存していた。付近のピットから鉄製の刀子が発見されていることもあわせて考えるとＳＫ 263 が当該期の墓である可能性も考えられる。

（4）鎌倉時代の遺構

斜面下の調査区で溝（ＳＤ 285・ＳＤ 286・ＳＤ 287・ＳＤ 288・ＳＤ 289・ＳＤ 295）を確認した。底面の粗粒砂層から７型式および８型式とみられる山茶椀[3]が出土しておりこれらの溝も鎌倉時代のものと思われる。

この溝の付近、調査区の西端部については、調査区壁面の土層観察によって水の溜まる沼状の地形であったことがわかっている。そこから南東方向へ伸びるＳＤ 286 から枝分かれするように溝群が調査区以南に延びている様子が確認された。このような水の流れを示す遺構の発見は、この地域における土地利用や開発の変遷を考察する上で重要な資料となるものと考えられる。

３. 遺物

今回の調査では比較的多くの遺物が出土しており、年代についても弥生時代から古墳時代を中心に、鎌倉時代に至るまでの幅広い時期にわたっている。

出土遺物の多くを占める弥生時代後期～古墳時代初頭の土器については、高杯・甕・壺など代表的な器種に加えてＳ字状口縁台付甕やパレス壺といった伊勢湾沿岸地域の遺跡において広く見られるものも出土している。そして出土状況の特徴としては、古式土師器を中心に竪穴住居埋土の上層から出土したものが多いことがあげられる。これについては竪穴住居が廃絶し、土が堆積していく過程において、廃棄されたものが主体となることを想定できる。現在のところ上層から多くの土器が出土した住居跡は台地上のもの（ＳＨ 201・ＳＨ 204・ＳＨ 228 等）に限られており、遺構の項で先述したように台地上では古墳時代初頭まで集落が継続していたことも踏まえて検討を加える必要がある。

その他注目される遺物としては、台地上の竪穴住居（ＳＨ 201）の壁面付近から出土した水色のガラス小玉のほか、同じく台地上の竪穴住居（ＳＨ 203）から出土した小型の砥石、斜面下の竪穴住居（ＳＨ 271）から出土した長辺が 40cm を超える大型の砥石がある。砥石については表面の様子から金属を研ぐのに

写真 52　ＳＨ 205 出土高杯

写真 53　ＳＤ 246 出土パレス壺

写真 54　ＳＨ 228 上層遺物出土状況（北から）

使用されたと考えられる。

金属器については、ＳＨ 271 の南側にあるＳＫ 280 から出土した金属片が、弥生時代後期の鉇の特徴を有している。ＳＫ 280 からは弥生土器の小片も出土しており、近くのＳＨ 271 など弥生時代の竪穴住居から流出した可能性が想定される。

4. まとめ

今回の調査では弥生時代から鎌倉時代までの幅広い年代の遺構・遺物を確認することができた。特に、この場所に想定されていなかった弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落が発見されたのは大きな成果といえよう。

当遺跡より北西約 300 m と隣接する小牧北遺跡では弥生時代後期の土器棺墓や方形周溝墓が複数確認されているが、同時期の集落は確認されていない。[3] 今回北山城跡で弥生時代の集落が確認されたことにより、今後の調査においてこの二つの遺跡が墓域と集落という有機的な関係を有していたかどうかを明らかにすることができるであろう。

そして遺物についてであるが、ここではＳＫ 280 から出土した弥生時代後期の鉇に注目したい。朝明川中流域は弥生時代後期における鉄器の出土割合が県内でも高い地域となっており、右岸では当遺跡から南東に約 5 km 離れた丘陵上に位置する山奥遺跡で、鉇をはじめとした 14 点の鉄器が出土している[5] ほか、当遺跡が位置する左岸でも、約 4 キロ下流の丘陵斜面に位置する苑上遺跡で鉄片と鉄器用と想定される砥石が出土し[6]、約 5 km 下流に位置する環濠を伴った高地性集落である金塚遺跡と、それに隣接する

写真 55　ガラス小玉・小型砥石・刀子・鉇

城ノ谷遺跡でも鉇が出土している[7][8]。

伊勢湾岸地域では弥生時代後期に石器から鉄器への移行が進んだものと考えられている[9] が、今回の発見はこれらの類例とあわせ、朝明川中流域におけるその過程の推移を考察する上でひとつの資料となるのではないか。

なお、ＳＨ 201 出土のガラス小玉についても当遺跡より南東に約 4 km 離れた西ヶ広遺跡の竪穴住居跡から 8 点の出土例がみられる[9] 鉄器の出土例とあわせ、朝明川中流域における集落間の交流状況を検討する上で示唆的なものである。そしてこれら鉄器やガラス製品がどこから伝わったものかということについては、伊勢湾岸地域をつなぐ南北のルートと、近江と伊勢湾岸地域を結ぶ東西のルートが接しているというこの地域の特徴を踏まえ、今後調査成果に対し慎重な検討を加える必要があろう。

ただ、残念なことに今回の調査では北山城域郭に関わる、中世後期と推測される遺構・遺物は確認できなかった。今後の調査では城郭により近い区域の調査も予定されていることから北山城本体に関わる遺構を含め、中世後期に関わる遺構・遺物の発見が期待できる。

[註]

① 高田徹「織豊期における北勢四郡の城館」『中世城郭研究』８号　中世城郭研究会 1994

② 編年は藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』３号 三重県埋蔵文化財センターによる。

③ 三重県埋蔵文化財センター『小牧北遺跡発掘調査報告』2007

④ 四日市市教育委員会『山奥遺跡Ⅱ』2004

⑤ 三重県埋蔵文化財センター『苑上遺跡発掘調査報告』2005

⑥ 三重県埋蔵文化財センター『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡・発掘調査報告』2002

⑦ 三重県埋蔵文化財センター『城ノ谷遺跡発掘調査報告』2004

⑧ 原田幹　「石器からみた弥生時代の生産と流通」『川から海へ１』一宮市博物館 2002

⑨ 三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡（第３・４次）』発掘調査報告 2006

8　小社遺跡（第２次）

１.はじめに

当遺跡は鈴鹿市小社町に所在し、鈴川左岸の扇状地上に立地する（写真56）。鈴川の南西には鎌倉時代を中心とした集落の釜垣内遺跡がある。この他に周辺には東荒野遺跡や神戸遺跡、井領田遺跡など中世の遺物散布地が存在する。

２.調査の概要と結果

遺構検出面は浅黄色シルト～極細粒砂層を主体とする地山であり、遺構検出面までの掘削深度は0.2～0.4 mである。検出面は標高152～155 mであり、北から南へ緩やかに傾斜する地形となる。

（１）中世

土坑　調査区中央で４基確認した。ＳＫ９は円形で直径0.7 m、深さ0.1 mである。遺物は土師器（鍋）、常滑（片口鉢・甕）であり14世紀後葉～15世紀前葉の遺構とみられる①

ＳＫ11は不正形な楕円形をしており、一部が調査区外に延びる。現存の長辺３m、短辺2.6 mである。遺物は瀬戸美濃（天目茶椀）１点であり、16世紀中葉の遺構とみられる②

ＳＫ22は楕円形で長径0.9 m・短径0.6 m、深さ0.3 mである。遺物は土師器（鍋）、常滑（甕）であり15世紀中葉～16世紀初頭の遺構とみられる。

ＳＫ23は円形で長径1.75 m・短径1.25 m、深さ0.06 mである。遺物は土師器（鍋）、常滑（片口鉢）・鉄製品１点であり13世紀後葉～14世紀初頭の遺構とみられる。

方形土坑　調査区中央で１基確認した。ＳＫ14は一辺4.0 m、深さ0.6 mである（写真57・58）。0.3～0.4 mの礫が土坑内に崩落した状態で出土した。北東・南東の壁面では、礫が内側に面を揃えられ配された状態が確認された。本来は、礫が壁面の周囲に巡っていたものと見られる。土坑底部では0.05～0.2 mの礫を大量に含む固く締まった粘土層がみられ、貼床であった可能性も考えられる。

出土遺物は土師器（皿・鍋）、灰釉陶器（椀）、古瀬戸（四耳壺）、常滑（片口鉢）等があり、14世紀後葉～15世紀初頭の遺構とみられる。

ピット　ＳＫ11の北側のピットから瀬戸美濃（擂鉢・茶入）が出土した。時期は16世紀中～後葉とみられる。

（２）近世

遺構は17世紀初頭～18世紀中葉のものがあり、その内17世紀代が主体とみられる。土坑13基、溝５基が確認された。

出土遺物は土師器（皿・鍋）、瀬戸美濃（天目茶椀・丸椀・折縁皿・花瓶・擂鉢）、常滑（片口鉢・甕）、信楽（片口鉢）等が見られる。

また、調査区外で一石五輪塔が１基発見された（図19、写真59）。石材は花崗岩であり、断面長方形の柱状材を加工している。各輪を形成する溝はやや粗い仕上がりである。空輪上端は一部欠損し、地輪底部は埋没しているため、残存長が41.5cmとなる。地輪は18.5cm × 17.1cmであり長方形を呈す。本年度の調査範囲には含まれないため現地保存している。

また、表土では縄文時代前～中期とみられる石鏃

写真56　調査区遠景（南から）

が出土している。包含層からは古代の土師器甕・灰釉陶器、中世の山茶椀等が出土した。

3.まとめ

今回の調査では中世後期～近世中期にかけて連続した遺跡の様相が確認できた。建物跡は確認できなかったが、周辺に当該期の集落跡が存在する可能性が高いと考えられる。さらに、今後の調査によっては古代・中世の集落が明らかになることも期待できる。

[註]

① 瀬戸美濃の編年は次の文献を参照した。
愛知県史編さん委員会『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』愛知県　2006

② 常滑の編年は次の文献を参照した。
愛知県史編さん委員会『愛知県史　別編　窯業３　中世・近世　常滑系』愛知県　2012

写真 57　ＳＫ 14 大礫出土状況（北西から）

写真 58　ＳＫ 14 大礫取り上げ後（西から）

写真 59　一石五輪塔（西から）

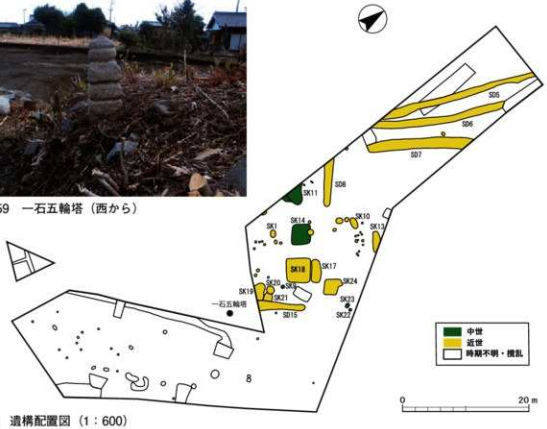


図 19　遺構配置図（1：600）

9　釜垣内遺跡（第２次）

１.はじめに

当遺跡は鈴鹿市小岐須町に所在し、鈴鹿山脈の仙ヶ岳と入道ヶ岳から発する御幣川左岸の扇状地上に立地する（写真60）。周囲には中世の遺物散布地である上分田遺跡や寺垣内遺跡、戦国時代の築城とみられる小岐須城跡等がある。

２.東区

（1）縄文時代

埋納土坑　調査区北寄りでＳＫ50の１基のみ確認し、縄文時代晩期の深鉢１点が出土した（写真61）。深鉢は体部片が逆位にある底部片上に折り重なった状況で出土した。こうした状況から深鉢は倒立状態で埋納された後に、土圧により底部が土器内部に落ち込み、その後に体部が内側へ崩壊したものと考えられる。

（2）鎌倉時代

掘立柱建物　調査区中央から北寄りにかけて４棟確認した。各建物の柱穴から山茶椀や土師器鍋等が出土しており、遺物から12世紀後葉～13世紀前葉の建物と考えられる。

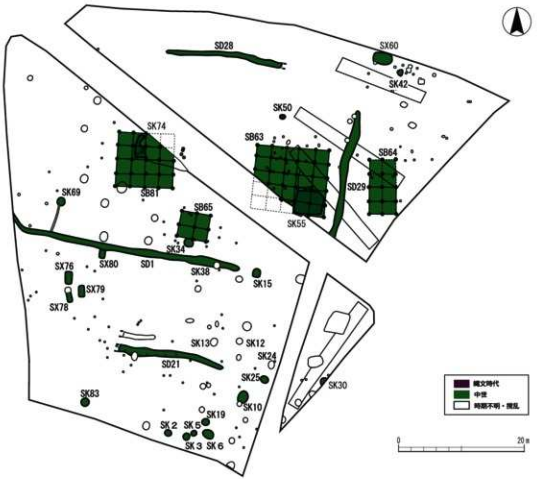
ＳＢ63は桁行５間・梁行５間の総柱建物で主軸はN-9°-Eである。ＳＢ63の南東隅には方形土坑（ＳＫ55）があり、建物に伴うとみられる。ＳＫ55からは13世紀前葉の山茶椀・片口鉢（６型式）が出土した[1]。

また、掘立柱建物群を取り囲むように溝（ＳＤ１・28・29）が見られる。ＳＤ１が西端で北へ屈曲し、建物群の周囲を巡ることから、これらの溝は建物群を区画する地割であることが考えられる。

写真61　ＳＫ50遺物出土状況（北から）

写真60　調査区遠景（北東から）

東地区



西地区

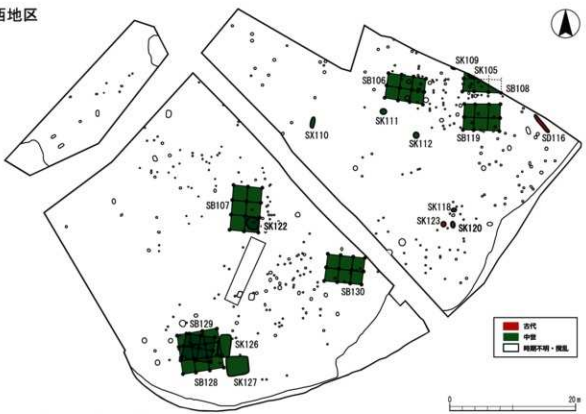


図 20　遺構配置図（1：600）

ＳＤ１・28・29では山茶椀・小皿（５～６型式）を主体として、土師器（皿・鍋）、常滑（甕）、渥美（甕）が出土しており、時期は12世紀後葉～13世紀前葉と考えられる。

土坑墓　調査区北東で１基、南西で４基確認した。特にＳＸ76・78・79（写真63）は密集しており、規模や方位も比較的近似している。

ＳＸ60（写真62）は平面形態が隅丸長方形を呈しており、主軸は東西を向く。規模は上面2.2ｍ×1.48ｍ、下面2.04ｍ×1.32ｍ、深さ0.15ｍである。木棺の痕跡については確認できなかった。

遺物は山茶椀（６型式）11点であり、土**坑**の西から中央にかけて出土した。この内、１点の外面底部には「大」の墨書がある。時期は13世紀初頭とみられる。この他に、土**坑**中央から北寄りにかけて拳大の大礫が４点出土しており、いずれも自然石である。

ＳＸ76（写真64）は平面形態が隅丸長方形を呈しており、主軸は南北を向く。規模は上面2.0ｍ×0.82ｍ、下面1.8×0.72ｍ、深さ0.18ｍ～0.26ｍである。木棺の痕跡については確認できなかった。

遺物は山茶椀１点・小皿10点（５～６型式）や和鏡１点、鉄製品４点（鋏・毛抜き・刀子？等）が出土した。時期は13世紀初頭と考えられる。

写真63　ＳＸ76・78・79（南から）

写真62　ＳＸ60遺物出土状況（北から）

写真64　ＳＸ76山茶椀・小皿出土状況（西から）

写真65　ＳＸ76（西から）

写真66　ＳＸ76和鏡・鉄製品等出土状況（西から）

出土状況は山茶椀1点が中央南寄りにあるものの、小皿・和鏡・鉄製品は墓**坑**の北東にまとまっていた（写真65・66）。また、山茶椀・小皿は墓**坑**中央に向かい落ち込んだ状態であるのに対し、和鏡・鉄製品は墓**坑**の底部付近から出土した。このことから和鏡・鉄製品は棺内の副葬品であり、山茶椀・小皿は棺外の供膳具とみられる。

ＳＸ78（写真67）は平面形態が隅丸方形であり、主軸は南北を向く。規模は上面1.75 m × 0.79 m、下面1.59 m × 0.71 m、深さ0.25 mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

遺物は土師皿10点であり、その内7点が墓**坑**北西隅の底部付近でまとまり出土した。さらに、この土器群から東で3点がまとまり、墓**坑**中央に向かい落ち込んだ状態で出土した。時期は13世紀前葉と考えられる。

ＳＸ79（写真68）は平面形態が隅丸長方形を呈しており、主軸は南北を向く。規模は上面1.65 m ×0.86 m、下面1.52 m × 0.76 m、深さ0.1 mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

遺物は山茶椀（６型式）3点、土師皿4点が墓**坑**北東隅にまとまり、墓**坑**中央に向かい落ち込んだ状態で出土している。時期は13世紀前葉と考えられる。

ＳＸ80（写真69）は平面形態が隅丸長方形を呈し南北を向くが、北端は溝ＳＤ１により削平される。規模は上面1.6 m × 0.74 m、下面1.46 m ×0.54 m、深さ0.3 mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

遺物はロクロ土師器椀2点が墓**坑**北東で合口に据えられた状態で出土した。2点とも底部には糸切痕が残り、口縁部から体部にかけての調整はロクロナデである。時期は12世紀中～後葉とみられる[3]

大型土坑　直径0.8 ～ 1.7 m、深さ0.6 ～ 1.5 mの大型土坑を24基確認した。調査区北西から南東にかけ帯状に広がりがみられる。出土遺物は確認されず、いずれも時期不明である。

大型土坑の内、ＳＫ12・13・24・38では土坑底部に円形の小穴がみられる。小穴は底部中央に1箇所のみ施され、径0.2 m程で深さ0.25 ～ 0.3 m程である。これら土坑は落し穴の可能性も考えられるが、小穴から杭状の痕跡を確認することはできなかった。

3. 西区

（1）縄文時代

遺構は確認されていないが、表土から晩期の突帯文土器の深鉢が出土した（図21）。口縁部は短く外反しており、外面に素文突帯が付く。器面の調整は外面に斜条痕、内面に条痕が施される。

（2）奈良・平安時代

奈良時代の遺構は調査区の東寄りで溝1条（ＳＤ116）と土坑1基（ＳＫ123）が確認されたのみであ

写真67　ＳＸ78遺物出土状況（西から）

写真68　ＳＸ79遺物出土状況（西から）

写真69　ＳＸ80遺物出土状況（南西から）

写真 70　ＳＢ 106（東から）

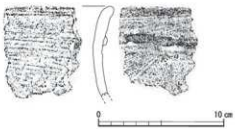


図 21　縄文土器実測図（1：3）

写真 71　ＳＢ 106 柱穴遺物出土状況①（北から）

写真 72　ＳＢ 106 柱穴遺物出土状況②（北から）

写真 73　ＳＢ 106 柱穴遺物出土状況③（北から）

写真 74　ＳＢ 106 柱穴遺物出土状況④（北から）

写真 75　ＳＢ 106 柱穴遺物出土状況⑤（北から）

る。ＳＤ116からは須恵器（杯身）・灰釉陶器（壺）、ＳＫ123からは須恵器（杯蓋）が出土した。

この他に土坑やピットから暗文土師器（皿）・ロクロ土師器（皿）・黒色土器（椀）・志摩式製塩土器の細片が出土した。

（3）鎌倉時代

掘立柱建物　調査区北東と中央から南にかけ7棟を確認した。ＳＢ106（写真70）の北東隅柱穴では、柱抜き取り後に土器と大礫を交互に重ねて埋納した状況が確認された。

埋納状況は柱穴底部に山茶椀を二分に割ったものを正位に据え（写真71）、この上に握り拳大の礫を配している（写真72）。続いて、礫の上部に山茶椀・土師器の砕片と拳大の礫を置いている（写真72・73）。さらに、礫の上に山茶椀を伏せ（写真74）、山茶椀の上に拳大の礫を配している（写真75）。出土した山茶椀は5型式であり、12世紀後葉の遺構と考えられる。なお、礫はいずれも自然石である。

土坑墓　調査区中央北寄りで土坑墓を1基確認した。ＳＸ110（写真76）は平面形態が楕円形を呈しており、南北を向く。上面1.8 m×0.5 m、下面1.54 m ×0.25 m、深さ0.25 mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

出土遺物は墓坑北東隅に完形の山茶椀（5型式）1点が伏せられた状態で出土した。時期は12世紀後葉と考えられる。

4. まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の集落と墓域の存在が明らかとなり、12世紀後葉～13世紀前葉と比較的短期間に機能していた様相が判明した。また、居住域は溝により区画され、居住域外に近接して墓域を形成する集落形態の一様相が明らかとなった。

さらに、西区では古代に遡る土器がみられることから、近隣には鎌倉時代に先行する集落跡が存在することも考えられる。

［註］

① 山茶椀の編年は次の文献を参照した。
藤澤良祐「山茶碗の型式編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ　瀬戸市歴史民俗博物館　1982

② 和鏡の鏡・背面には木箱と想定される木板が融着する。
さらに、木板上に複数の鉄製品が融着した脆弱な状態にある。現在、保存処理の段階にあるため、鏡・鉄製品等の詳細は改めて提示したい。

③ ロクロ土師器については、次の文献を参照した。
水橋公恵「付論3　木造赤坂遺跡と伊勢平氏・平正度」『一般国道23号中勢道路（13工区）建設事業に伴う木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井出ノ上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2012

写真76　ＳＸ110遺物出土状況（南西から）

10　野中遺跡（一次）

対象地は多奈閇神社から南側へ下る緩斜面である。調査の結果、表土下には全体的に厚さ20cmから1m以上の客土が認められる。T４・５の一部で客土下に旧表土が認められたが、全体的には攪乱も多く本来の層序の確認は困難である。橙色粘質土5YR6/6を検出面と判断したが、前述の事情からそれに至る深さは15cm～1m以上まで多様である。検出面は粘質土であるが、標高の高いT４・５の北端付近では礫を多く含んでいる。これらにより対象地は大規模な造成が行われたものと考えられ、検出できた遺構はT１の東部で数基のピットを確認したに止まり、その時期は確認できなかった。他に多数の溝を検出しているが、現地表に痕跡を残すことや、埋土の状況から現代の耕作に伴うものと考えられる。他にピット状遺構の検出もあるが同様のもので、遺物も古墳時代と思われる須恵器・土師器の小片が若干出土したのみである。以上により対象地は、遺跡の縁辺部か、前述の造成や耕作により遺構が削平されたものと考えられる。

写真77　T１（東から）

写真78　T３（東から）

写真79　T４（南から）

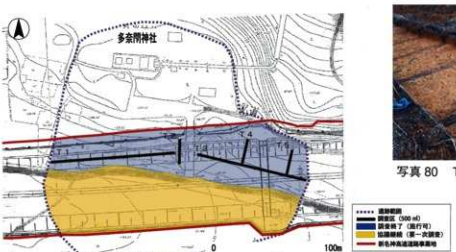


図22　調査区配置図（1：3,000）

写真80　T１検出状況（南東から）

11　小牧南遺跡（一次）

1. はじめに

小牧南遺跡は、平成５年に新たに発見した遺跡で、四日市市小牧町の朝明川南側の台地斜面に立地する。

2. 調査の概要と結果

昨年度の一次調査（460 ㎡）に続き、本年度の調査は、幅２ｍのトレンチを 13 箇所（800 ㎡）設定して実施した。

遺構検出面は灰褐色系シルトが主体である。また遺跡範囲の大部分は黄褐色シルト系の地山であるが、一部では削平などにより段丘砂礫土を地山とする部分も認められた。

遺構検出面までの掘削深度は 0.2 ～ 0.6 ｍ、検出面の標高は 35 ～ 37 ｍである。遺構は、古墳時代前期と飛鳥時代の竪穴住居跡（Ｔ 10,11,12）や時期不明の土坑・ピットを確認した。特に数を把握しやすい竪穴住居跡は、昨年度調査区と合計して 10 棟以上を確認した。二次調査となると、遺跡東側を中心に相当数の検出が予想される。またトレンチでは把握が困難なものの、ピットが並ぶ箇所もみられ、掘立柱建物の存在も想定される。遺物は縄文土器（Ｔ３）・土師器（Ｔ 10,11）・須恵器（Ｔ 12）で、土師器は古墳時代前期のものと飛鳥時代のもの、須恵器は飛鳥時代のものに区分できる。縄文土器は、昨年度調査でも遺構に伴い出土している。

以上の調査結果から、遺構・遺物が発見されなかった調査区の西部分（Ｔ４～６）を除いた範囲を２次調査の対象とした。

写真 81　Ｔ３（東から）

図 23　調査区配置図（1：2,000）

調査坑 No.	調査面積 m×m(㎡)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物
T1	2×30 (60)	40～50	土坑・ピット	なし
T2	2×35 (70)	30～70	土坑・ピット	なし
T3	2×30 (60)	20～60	土坑・ピット	縄文土器
T4	2×25 (50)	80～140	溝・ピット	なし
T5	2×15 (30)	20～90	土坑・ピット	なし
T6	2×40 (80)	100～130	ピット	なし
T7	2×40 (80)	20～75	土坑・ピット	なし
T8	2×20 (40)	50	土坑・ピット	なし
T9	2×20 (40)	30～60	ピット	なし
T10	2×40 (80)	20～40	竪穴住居・土坑ピット	土師器
T11	2×30 (60)	40～55	竪穴住居・土坑ピット	土師器須恵器
T12	2×50 (100)	20～30	竪穴住居・土坑ピット	なし
T13	2×25 (50)	30～40	土坑・ピット	なし

表9　一次調査結果一覧（平成 24 年）

写真 82　T 10（北から）

写真 83　T 11（西から）

図 24　一次調査結果（平成 23・24 年度）（1：2,000）

12　野添御飯山古墳（一次）

1. はじめに

野添御飯山古墳は、三重郡菰野町の朝明川と海蔵川に挟まれた微傾斜地に所在する以前から周知されていた[1]単独の古墳であったが、平成18年度に実施した分布調査により新たに古墳と考えられる高まりが1基追加された。そのため便宜的ではあるものの北に位置するものを1号墳、南に位置するものを2号墳と名称付けた。いずれも標高52～53 m程に位置する。

またこの2基の古墳周辺にはマンボ[2]の横坑が開口している箇所がみられ、その痕跡と推測される落ち込みなどを含めると合計で5箇所の横坑の存在した可能性がある。また事業地外ではあるものの、このマンボ横坑群に伴うであろう竪坑（掘削時の息ぬきや横井戸に付随する竪井戸のものもあり、日穴と呼ぶ場合もある）も70～100 m間隔で4箇所に認められる。竪坑の並ぶ場所から200 mほど北には土取池と呼ばれる貯水池が位置しており、水源としての機能が想定される[3]。これらを踏まえると仮称・野添マンボは、土取池からの取り水口としての開口部と野添地区の川北村や諏訪村を中心とする田畑、あるいは両村集落の生活用水としての機能も併せ持った用水供給口とも言える開口部をもつ「導水型」マンボとして機能していたと考えることができる[3]。

2. 古墳

（1）1号墳

1号墳は東西15 m、南北20 mほどの平面不整方形を呈した高さ1.5 m程の盛土である。幅2 mのトレンチを4箇所に設け、調査面積は100 ㎡である。当初から盛土上に樹木や腐葉土がなく、赤褐色系のシルトが露出していたため、古墳ではなく、別の時代の盛土であることも推測された。そのため、古墳の

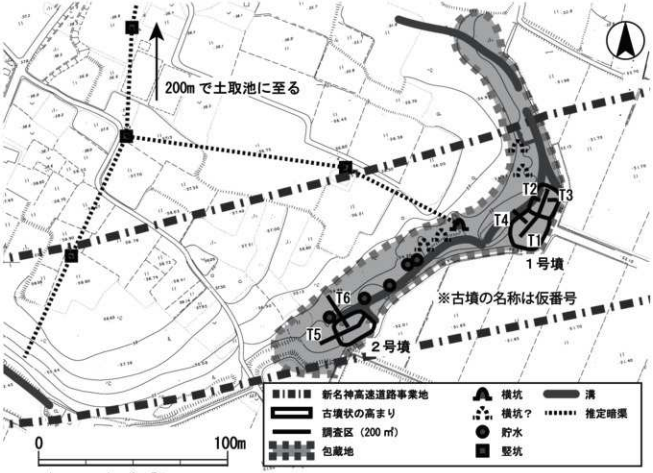


図25　調査区配置図・マンボ分布図（1：2,000）

盛土の可能性を残しつつ、それよりも新しい時代の盛土であることも念頭に置きながら調査を進めた。

その結果、Ｔ１、Ｔ２、Ｔ３では赤褐色シルトが（最大で 1.5 m 程、薄い場所では 0.1 m 程）盛られていたものの、その下層から現代のビニールやガラス瓶、磁器などを含む黒色シルトを確認した。またＴ１の南側やＴ４では、薄く赤褐色シルトが盛られ、最下層では明らかに重機などで掘り下げられた痕跡がみられる。

こうした１号墳でみられる赤褐色シルトは、後述するが２号墳周辺の調査の様相から、１号墳西側の微傾斜地の地山に由来するものと考えられる。恐らくは、周辺の地山を掘り込んだ後に廃棄物を含む黒色シルトを埋め、赤褐色シルトを被せたのであろう。遺物は現代より古いものは全く出土しなかった。

以上のことから１号墳は古墳ではなく、現代の盛土であることが明らかとなった。なお黒色シルトの下層での遺構や遺物の確認はなかった。

写真 84　Ｔ１北側（北から）

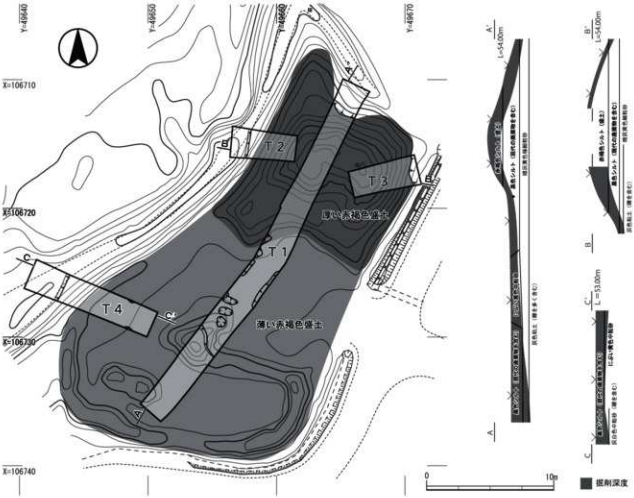


図 26　１号墳平面図・断面模式図（1：300）

（2）２号墳

１号墳から 100 mほど南に位置する東西 20 m、南北 10 m程の平面長方形を呈した高さ 1.9 m程の盛り土である。幅２mのトレンチを２箇所に設け、調査面積は 100 ㎡である。２号墳は町史で指摘されていた古墳と考えられるが、その形状などから古墳ではなく、中世の塚などの盛土状遺構であることも充分に考えられた。

Ｔ５は盛土を東西方向に横断する長さ 30 mのトレンチで、腐葉土直下より盛土上層となりえる明黄褐色細粒砂を確認した。遺構は確認できなかったものの、ほ場整備以前に使用されていたであろうマンボの用水路を確認した。遺物は主に表土や細粒砂面から山茶椀片や陶磁器片、瓦片、砥石が出土した。

遺物の中で特筆すべきものは山茶椀１～３（図 29）であるが、風倒木周辺の表土から散乱した状態で出土したに過ぎない。いずれも藤澤編年第３型式～第４型式[5]の椀や小椀の破片である。

陶磁器は小片となって多数出土している。時期が特定できたものとして、陶器の擂鉢（図化できず）があり、登窯第９小期のもので、19 世紀前葉であろう[6]。４（図 29）は仕上げ砥石で、陶磁器と近しい時期のものと推測され、石材は砂岩である。

Ｔ６は２号墳の盛土の頂部から北方向に設けた長さ 20 mのトレンチで、２号墳の背後に展開する傾斜地と、マンボの用水路と考えられる溝も合わせて掘削を行った。まず盛土の頂部では、Ｔ５と同様に腐葉土直下より盛土の上層と考えられる明黄褐色細粒砂や灰白色細粒砂を確認した。Ｔ５とは異なり、盛土の頂部では山茶椀などの遺物の出土はなかった。

傾斜地は先述した１号墳の盛土と近似する赤褐色シルトが地山であり、近世末～近代の陶磁器類をわずかに含む区画溝を確認した。またマンボ用水路の溝からも陶磁器類が多数出土しており、５（図 29）の広東椀をみると、登窯第９小期～第 10 小期のもので、19 世紀前葉～中葉のものと推測される[7]。

２号墳の盛土は調査の進行により、古墳でないことが確定的となったため、Ｔ５・Ｔ６の境界地点を断割りし、盛土状の遺構であるのかの土層確認を行った[8]。その結果、最下層以外のいずれの層も灰色系細粒砂を中心とする砂質土で構成されており、シルトなどの粘質土はみられなかった。層序は標高

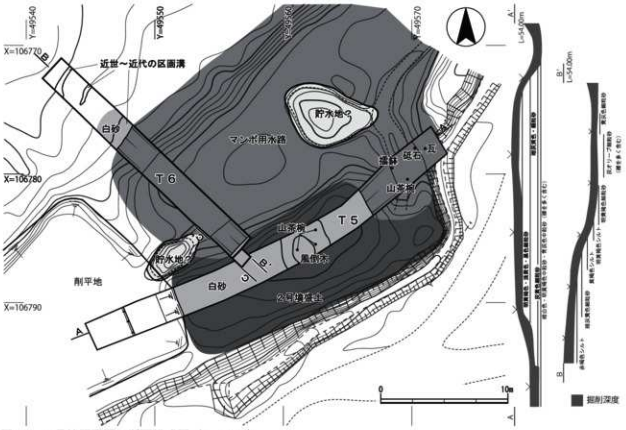


図 27　２号墳平面図・断面模式図（１：300）

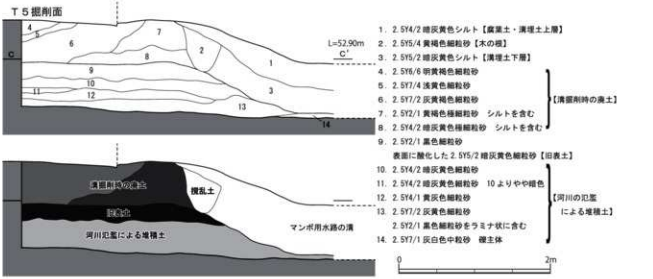


図 28　２号墳断割り土層図（1：50）

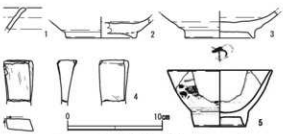


図 29　Ｔ５・Ｔ６出土遺物実測図（1：4）

52.90 m を境に、上層は溝を掘削した際の掘削土を盛り上げたもの、下層は自然堆積によるものであると推測する。以下、上層と下層に分け、検討を行った。

まず上層（４～８層・図 28）は、溝の立ち上がり端部から黄褐色細粒砂（７層）と暗灰黄色細粒砂（８層）が高さ 40cm ほどの土塁状に盛られており、さらにその上に明黄褐色細粒砂（４層）、浅黄色細粒砂（５層）、灰黄褐色細粒砂（６層）がなだれ込むように盛られている。こうした状況から、先述したとおり溝を掘削した際の掘削土を溝のすぐ近くに盛り上げたものではなかろうか。

次に下層（９～13）では、旧表土であろう腐葉土由来の黒色化した細粒砂（９層）がみられ、さらにその下層では灰黄褐色細粒砂（10・11 層）、黄灰色細粒砂（12 層）、ラミナの形成がみられる灰黄色細粒砂（13 層）順となり、それよりも下層では礫を主体とする粒の粗い白色中粒砂（14 層）となる。13 層にみられるようなラミナの形成や礫主体の中粒砂は、下層の堆積が近隣河川の氾濫に伴い運び込まれた可能性のあることを示している。また、盛土の対岸にあたる傾斜地でもやや標高が低い地点では、下層細粒砂と同等の灰白色細粒砂が褐色シルト上に薄く堆積しており、河川氾濫による細粒砂堆積の可能性をより高くする。

さらに近世～近代の文献には朝明川と海蔵川の氾濫の記載が度々みられる。特に朝明川は、1650（慶安３）年の「寅年の洪水」に代表されるような大氾濫があり、その氾濫は野添御飯山古墳が位置する川北よりも西の千草村や奥郷村を中心に甚大な被害を与えたようである。朝明川は奥郷周辺では大きく蛇行するような流路をとっており、そこから氾濫がおき、奥郷からは地形的に緩やかに傾斜する千草や池底、大強原、諏訪、川北などの海蔵川方面へと流入したものと考えられる。こうした災害の被害の様相や規模を計り知ることは困難であるが、海蔵川周辺の村々を川原に変え、全開拓地が流出してしまうような規模であったようで、氾濫に伴って多くの土砂が流入したと読み取れる記載もあり、今回確認した細粒砂などはこうした洪水によって運ばれた砂である可能性が考えられる[8]

以上から、Ｔ５・Ｔ６のいずれからも古墳時代の遺物はおろかそれ以降の時代の遺構も認められず、２号墳も古墳ではなかった。また盛土も、マンボの掘削に伴う盛土であり、中世の塚でもなかった。微

写真85　Ｔ６・Ｔ５境界断割り土層

傾斜地の裾部がマンボの用水路によって切り離され、また用水路の廃土の盛土によって、塚状に認識されてしまったものと思われる。

3. おわりに

当初は、近隣にある飛塚古墳や狐塚古墳、御飯山古墳[8]などに代表されるような益野町では数少ない古墳の調査として期待されたものの、調査の結果１号墳・２号墳ともに古墳ではなく、また町史でも推測されていたような中世の塚でもなかった。唯一、山茶椀の出土は予想していなかった発見であり、近隣にその時期の遺跡の所在する可能性がある。ただ、近隣一帯はほ場整備によって大規模に畑地化が進んでおり、山茶椀期の包蔵地の確認を近隣畑地に求めるのはかなり厳しい現状にある。

また野添マンボについては、用水路である溝から19世紀前葉～中葉頃の陶磁器が数多く出土しており、この時期には掘削されていたものと考えられる。推測の域をでないが、四日市市城で起源の明白なものとしては最古とされるマンボの「善八水道」は、1816（文化13）年の完成[9]であり、野添マンボ出土陶磁器と近しい時期である。野添マンボもこうした近世後期～末頃の時期に掘削されたと考えても矛盾はしない。

写真86　Ｔ６傾斜地の赤褐色シルト

マンボの出現時期については諸説ある[10]ものの、「善八水道」例を鑑みると、概ね近世後期～末葉に

写真 87　浚われなくなった野添マンボ

は北勢地方の各地で灌漑用水や生活用水を支える水資源確保のシステムとして確立し始めていたと推測される。特に野添マンボの位置する、諏訪村・川北村では 1649（慶安２）年、1725・1726（享保 10・11）年、1740（元文５）年、1789（寛政１）年と複数回、17 世紀中葉～ 18 世紀末葉の長期間にわたり山上戸用水水論[⑫]が起きており、村落をまたぐ用水の維持管理が非常に大きな問題を孕んでいたことを示している。こうした村落間の紛争を取り払うという意味でも、マンボ受益者である田子の全員が参加する必要のあった「マンボ浚え」[⑬]を行うことは有益に働いたと言える。マンボという村落内、あるいは村落を越えるような用水管理の運営システムの登場は、地域における農業用水の確保の視点のみではなく、村落間における長年のしがらみとなった用水の紛争問題解決に繋がり、以降の北勢地方の農業基盤、村落経営において欠かせないものとなっていった。それはマンボの運営が近年まで地域に深く根付いていたことからも窺い知ることができるのである。

［註］

① 菰野町史では、野添御飯山古墳と確実には特定できないものの、「川北字野添集落内に古墳が１基ある」との記述があり、「古墳の残った一部か中世の墓地かははっきりとしない」と指摘されている。
菰野町教育委員会『菰野町史』上巻 1987

② 近世～近現代を中心に掘削された灌漑用水を得るためのカナート状の横井戸で、地下水や貯水池から利水地までを結ぶ暗渠用水のことである。三重県北勢地方を中心に分布し、その他にも岐阜県や愛知県、新潟県、福井県など日本各地でやや偏在的に分布が認められるようである。
水谷正一ほか「マンボと地域農業」『「マンボ」―日本のカナート』三重県郷土資料叢書第 102 集 1988

③ 横坑と竪坑、土取池を結ぶと総延長で約１kmの暗渠用水が存在したと推測される。

④ 四日市市『四日市市史』史料編 自然 1990

⑤ 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター 1994

⑥ 藤澤良祐「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの―生産と流通―』記念講演会・シンポジウム資料集　財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006

⑦ 調査を進行しても古墳時代の遺物の出土が全くなく、主体部の痕跡も認められなかった。また盛土とされる高まりも砂質土が主体であり、しまりも弱かった。そのため古墳ではないと判断した。ただ、山茶碗や陶磁器の出土により、中～近世の塚などの可能性は依然として残ったため、深堀を行った。

⑧ 参考文献は前掲①と同じ。

⑨ 菰野町には、野添御飯山古墳とは別に御飯山古墳がある。野添御飯山古墳から 800 mほど西の菰野町大強原字狐塚に所在している。調査などは行われていない。また径 11 m程の円墳である狐塚古墳もほぼ付近に所在する。
参考文献は前掲①と同じ。

⑩ 前掲④と同じ

⑪ 北勢町平野新田の六反マンボ 1638（寛永 13）年が最も古い例として挙げられる。ただし、近世後期～近代のマンボとの直接的な系譜は不明である。
池隆肆「水稲直播栽培とその技術的分析－三重県鈴鹿台地の実態から」『農業技術』第８巻 12 号 1963

⑫ 主に用水における井堰の設置、取払いに関する紛争。参考文献は前掲①と同じ。

⑬ マンボはその構造上、竪坑からの砂礫やゴミの転落などがあり、それらを清掃する作業を行う必要があった。生活用水を兼ねるようなマンボの場合は、村全戸が総出で、「マンボ浚え」を行ったようである。
参考文献は前掲④と同じ。

13　大松遺跡（一次）

1. はじめに

当遺跡は鈴鹿市大久保町に位置し、扇状地の扇央部に位置する。平成19年の遺跡分布調査において新たに発見され、その際には石鏃、土師器、染め付け陶器が採取されている。現況は田畑である。

周辺に小社遺跡、折子遺跡、高ノ瀬遺跡といった遺跡群が、また椿大神社（伊勢一宮）が所在しており、集落跡の可能性があると考えられた。

2. 調査の概要と結果

調査にあたっては幅2mのトレンチを南北方向にそれぞれ45m設けて行った。面積としては180㎡である。表土下20～145cmでにぶい黄褐色粘質土（地山層）に達した。地山層は削平されており、礫層が露出している。この上面でピット、溝を検出した。しかし埋土の状況から新しいものであること、包含層もなく遺物も伴わないことから、これらのピットや溝を遺構として認定することはできなかった。

また、分布調査段階から採取された土師器、染め付け陶器等については、表面のみの採取にとどまったことから、当遺跡範囲外（扇状地の扇頂側）から流入したものと考えられた。

以上の結果から、当遺跡の高速道路建設予定範囲については、二次調査の対象外とした。

写真88　T1（北から）

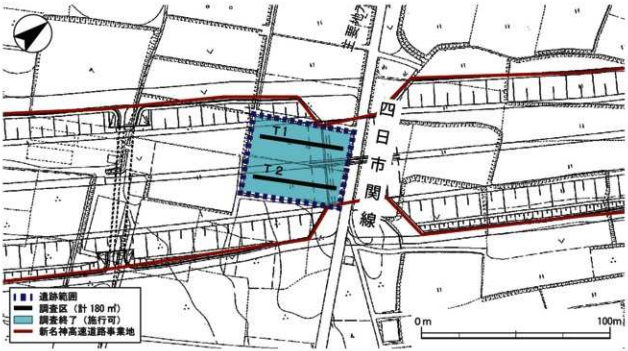


図30　調査区配置図（1：2,000）

14　高ノ瀬遺跡（一次）

高ノ瀬遺跡は、鈴鹿市山本町字高ノ瀬に所在し、北に雲母峰、北西に入道ヶ岳がある扇状地の扇端に位置する（標高 159 ～ 162 m）。鈴鹿市史（第三巻）によると本遺跡周辺は、江戸～昭和にかけて開墾された地域となっている。平成 22 年度に三重県埋蔵文化財センターが分布調査を行ったところ対象地のかなり広い範囲で灰釉陶器片や山茶椀片が見つかっている。今回の調査は、この分布調査を受けて、用地買収が完了した場所の一次調査を実施した。

20 本のトレンチを設定し、調査区東側のＴ 11 より調査を進めた。遺構検出面は、黄灰色の粘質土を主体とする地山で、検出面の深さは、0.2 m～ 0.6 m である。Ｔ 10 の壁面からは、落ち込みと思われる部分が検出されたが、その部分の裏面を拡張して掘削した結果、遺構ではなく自然にできたものと判明した。またＴ 14 の壁面より土師器の甕の底部が出土した。それを受けて、出土地点の西側にＴ 21 を設定し掘削したが、これ以外の遺物や遺構を発見することはできなかった。その他のトレンチからは遺構・遺物とも発見できなかった。以上の調査結果から対象範囲の二次調査は必要なしと判断した。

写真 89　Ｔ 10（南西から）

写真 90　Ｔ 10（東から）

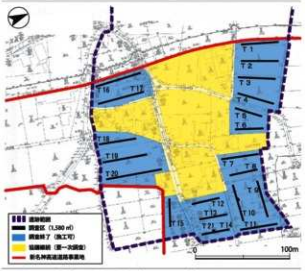


図 31　調査区配置図（1：4,000）

写真 91　Ｔ 21（Ｔ 14 側から）

写真 92　Ｔ 14 遺物出土状況

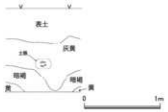


図 32　Ｔ 14 土層図（1：50）

15　折子遺跡（一次）

1．はじめに

折子遺跡は、鈴鹿市山本町に所在し、内部川が形成する扇状地上に位置する中世の遺物散布地である。分布調査では山茶椀片などの散布が確認されている。

2．調査の概要と結果

調査は幅２ｍのトレンチを６箇所（Ｔ１～Ｔ６）設定して実施した（図33）。

遺構検出面は褐色粘質土を主体とする地山で、遺構検出面までの掘削深度は0.3～1.7ｍである。

調査の結果、Ｔ３・４・５から溝を検出した。Ｔ３・５の溝は淵に人工的な部分も見られる谷状の落ち込みである。最も深い所で約1.8ｍを測り、黒褐色粘質土層と径約１～10cmの礫層が交互に幾重にも堆積している。この溝は形状や堆積土の状況により、自然地形の落ち込みを利用した現代の水路と推定される。周辺住民からの情報によると、この地域には畑地の区画整理以前に使われていた水路が存在していたようである。Ｔ４の溝は幅約1.3ｍ、深さ約0.7ｍを測り、堆積土等の状況から現代の溝と推定される。

全てのトレンチで、ピットを微量に検出した。いずれも形状と埋土の状況から根などの撹乱と判断した。また、全てのトレンチにおいて、出土遺物は１つも確認されなかった。なお分布調査で発見された遺物については、扇状地上流から流れ込んだものであると考えられる。

写真93　Ｔ３（北西から）

以上の調査結果から、当遺跡の高速道路建設予定対象範囲について、二次調査の対象外とした。

写真94　Ｔ４（東から）

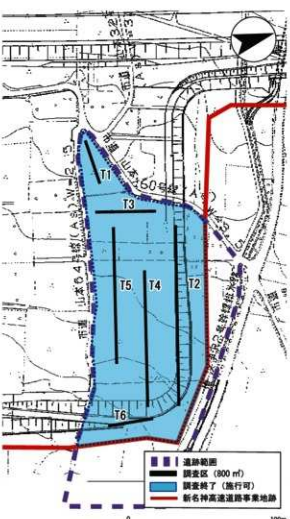


図33　調査区配置図（1：2,500）

16　東荒野遺跡（一次）

東荒野遺跡は、鈴鹿市山本町字東荒野に所在し、北西に入道ヶ岳、西に野登山がある扇状地の扇端に位置する（標高 157 m～ 160 m）。現況は、茶畑である。昭和 62 年度の鈴鹿市遺跡地図によると鎌倉時代の遺物散布地とされており、山茶椀や土師器が出土している。

鈴鹿市史（第一巻）によると、この遺跡付近には、小社遺跡・釜垣内遺跡・高ノ瀬遺跡などの鎌倉時代～安土桃山時代の遺跡がある（図 34）。今回の調査では、南北方向に３本、東西方向に２本、合計５本のトレンチを設定した（図 35）。

遺構検出面は、黄灰色の粘質土を主体とした地山で、東西方向に傾斜している。遺構掘削面の深さは、0.2 ～ 0.8 m である。調査対象範囲の、いずれのトレンチからも遺構・遺物ともに検出されなかった。以上の調査結果により、対象範囲については二次調査の対象外とした。

写真 95　Ｔ１（南から）

写真 96　Ｔ３（北西から）

図 34　東荒野遺跡周辺の遺跡（１：50,000）

図 35　調査区配置図（１：2,500）

写真 97　Ｔ５（北西から）

17　小社遺跡（一次）

当遺跡は鈴鹿市小社町に所在し、鈴川左岸の扇状地上に立地する。鈴川の南西には鎌倉時代を中心とした集落の釜垣内遺跡がある。この他に周辺には東荒野遺跡や神戸遺跡、井領田遺跡など中世の遺物散布地が存在する。

調査は事業地にて６箇所のトレンチ（計 400 ㎡）を設けて行った。遺構検出面は浅黄色極細砂層を主体とする地山である。遺構検出面までの掘削深度は 0.2 ～ 2.0 m であり、検出面の標高 149 ～ 154 m と高低差はあるが北から南へ緩く傾斜した地形となる。

さらに、Ｔ１の南端から 16 m範囲とＴ５の西端から５m範囲にかけ河川堆積層が認められ、北から南に向けて旧河川の流れが推定できる。

遺構ついては、Ｔ１で土坑１基を確認し、17 世紀初頭の瀬戸美濃（志野丸皿）が出土した。Ｔ３では土坑１基、溝１基を確認し 17 世紀中～後葉の土師皿・常滑（片口鉢）が出土した。Ｔ２の南端から 30 m範囲とＴ４・６では現代の撹乱により遺構は確認できない。

また、Ｔ２の包含層から弥生前期とみられる深鉢片（図 37）１点が出土した。口唇部及び器面内外に条痕が見られる。口縁部は部分的に摘み上げられ突起が施されている。この他にＴ５の表土から寛永通宝が１点出土した。

対象範囲は近世中期以降の遺構が主体となり、遺構密度は希薄であることが判明した。以上の調査結果より対象範囲は二次調査の対象外とした。

写真 98　Ｔ２（北から）

図 37　弥生土器実測図（１：３）

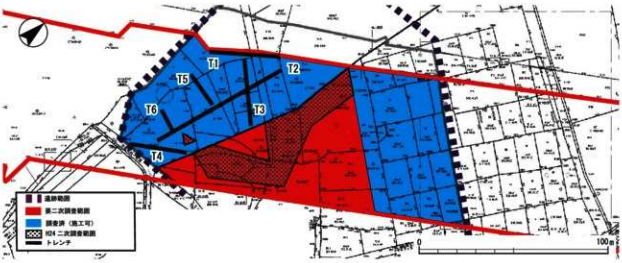


図 36　調査区配置図（１：2,000）

18　釜垣内遺跡（一次）

当遺跡は鈴鹿市小岐須町に所在し、鈴鹿山脈の仙ヶ岳と入道ヶ岳より発する御幣川北岸の扇状地上に立地する。周囲には上分田遺跡や寺垣内遺跡等の中世の遺物散布地、戦国時代の築城と伝えられる小岐須城跡がある。

調査は事業地にて７箇所のトレンチ（計 200 ㎡）を設けて行った。遺構検出面は黄褐色シルト～細礫層を主体とする地山であり、遺構検出面までの掘削深度は 0.4 ～ 0.6 mである。検出面の標高 153 ～ 154 mと西から東へ緩く傾斜した地形となる。

遺構はＴ１でピットから山茶椀の口縁部片が出土しており、時期は 12 世紀後葉～ 13 世紀前葉とみられる。Ｔ３ではピットから古代の須恵器（杯蓋）小片が出土した。

Ｔ２・３では幅約１ｍの南北方向に延びる溝跡が確認できた。Ｔ５・７では径約１ｍの土坑が確認された。共に出土遺物はないため時期は不明である。この他に、表土・包含層より 12 世紀後葉～ 13 世紀前葉の山茶椀が数多く出土した。

調査結果より、対象範囲の全体に中世の遺構が広がると考えられることから二次調査の対象とした。

写真 99　Ｔ２（東から）

写真 100　Ｔ４（南西から）

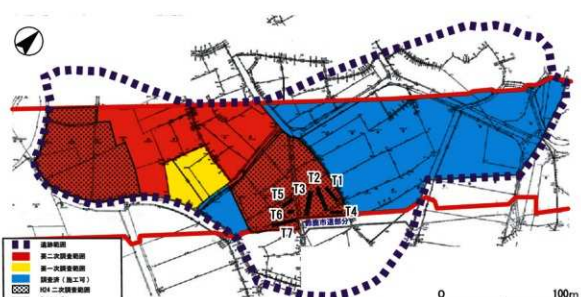


図 38　調査区配置（1：3,000）

19　小牧南遺跡（工事立会）

1. はじめに

小牧南遺跡は、平成５年に実施した分布調査で新たに発見した遺跡で、四日市市小牧町の朝明川南側の台地斜面に立地する。

平成 23 年度に市道小牧 27 号線の西側部分で一次調査を実施した結果、古墳時代前期の竪穴住居を多数確認した。その結果と周辺の地形から判断して、平成 24 年６月に遺跡範囲を東側へ拡大した。

2. 調査の概要と結果

本線の南側の側道に計画されている範囲に、近隣住居への車両乗り入れ工事を行うということで、幅２m、長さ 16 mのトレンチを設定して工事立会調査を実施した。現地表から概ね 1.8 mの深さは、造成の盛土であり、地山と判断した黄灰色粗砂（レキを含む）は、北東方向に向かって緩やかに傾斜することを確認した。これ以上深く掘削するには重機の限界であり、また危険であると判断した。

調査前に地元住民から、調査区周辺は、２m以上の北方向へ大きく開口する谷か沢の様相であったと聞き取りもしており、また遺物の出土もないため、調査を終了した。

写真 101　調査区（東から）

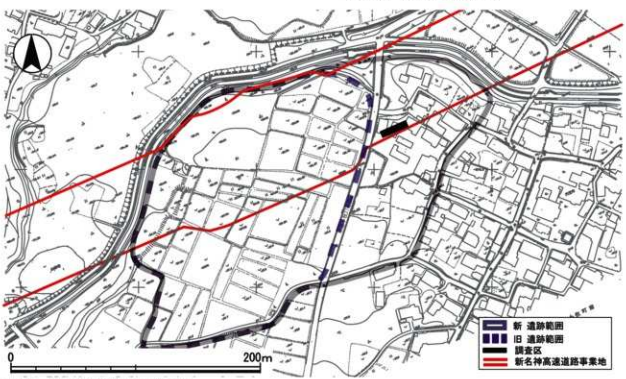


図 39　調査区位置図（1：3,000）

報告書抄録

ふりがな	きんきじどうしゃどうなごやこうべせん（よっかいちじゅんくしょんからかめやまにしじゅんくしょん）けんせつじぎょうにともなうまいぞうもんかざいはっくつちょうさけいほう　さん
書名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	Ⅲ
編著者名	森川常厚・服部芳人・松永公喜・浅野隆司・宮崎久美・鈴木規之・中村法道・東谷洋平・矢田　陽・宮原佑治・小原雄也
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦2013（平成25）年8月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きたやましーいせき 北山C遺跡	よっかいちしにしおかがちょう 四日市市西大鐘町 くわなしこ 桑名市志知	24202 24205 a	241 154	35° 2′ 56″	136° 36′ 1″	20121010 ～20130318	第2次調査 4,350	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業
のなかいせき 野中遺跡	よっかいちしきたかまちょう 四日市市北山町	24202	571	35° 2′ 58″	136° 35′ 51″		第1次調査 500	
きたやまよーいせき 北山A遺跡	よっかいちしきたかまちょう 四日市市北山町	24202	239	35° 2′ 54″	136° 35′ 20″	20120518 ～20130225	第3次調査 4,130	
なかのやまいせき 中野山遺跡	よっかいちしきたかまちょう 四日市市北山町	24202	238	35° 2′ 53″	136° 35′ 10″		第8次調査 3,012	
						20120518 ～20130115	第9次調査 7,700	
みぞがさきこふんぐん 筆ヶ崎古墳群	よっかいちしこまちょう 四日市市小牧町	24202	12～19 236	35° 2′ 59″	136° 35′ 2″	20120518 ～20130228	第3次調査 9,100	
きたやまじょうあと 北山城跡	よっかいちしきたかまちょう 四日市市北山町	24202	237	35° 2′ 49″	136° 34′ 47″	20120524 ～20130121	第2次調査 6,426	
こまきみなみいせき 小牧南遺跡	よっかいちしこまちょう 四日市市小牧町	24202	568	35° 2′ 32″	136° 34′ 0″	20121119	工事立会 165	
						20121220 ～20130322	一次調査 800	
のがえごはんやまこふん 野添御飯山古墳	みえぐんなるみちょうかみあいだ 三重郡菰野町川北	24341	122	35° 2′ 12″	136° 32′ 37″		一次調査 200	
おおまついせき 大松遺跡	すずかしおおくぼちょう 鈴鹿市大久保町	24207	1314	34° 57′ 58″	136° 28′ 0″	20121221 ～20130222	一次調査 180	
おりこいせき 折子遺跡	すずかしやまもとちょう 鈴鹿市山本町	24207	1343	34° 57′ 45″	136° 27′ 57″		一次調査 800	
たかのせいせき 高ノ瀬遺跡	すずかしやまもとちょう 鈴鹿市山本町	24207	1342	34° 57′ 40″	136° 27′ 51″	20121221 ～20130222	一次調査 1,580	
ひがしあれのいせき 東荒野遺跡	すずかしやまもとちょう 鈴鹿市山本町	24207	1042	34° 57′ 18″	136° 27′ 32″		一次調査 500	
こやしないせき 小社遺跡	すずかしこやしろちょう 鈴鹿市小社町	24207	1153	34° 57′ 10″	136° 27′ 23″	20121019 ～20130205	第2次調査 1,573	
							一次調査 400	
かまがいといせき 釜垣内遺跡	すずかしけがすちょう 鈴鹿市小岐須町	24207	1032	34° 57′ 0″	136° 27′ 12″	20120524 ～20121126	第2次調査 8,500	
							一次調査 200	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北山Ｃ遺跡	散布地	古墳・奈良	古墳・竪穴住居・掘立柱建物	土師器・須恵器	古墳は西山古墳として登録
野中遺跡	散布地	古墳	なし	須恵器	
北山Ａ遺跡	集落跡	飛鳥・奈良	竪穴住居･掘立柱建物･土坑	土師器･須恵器･製塩土器	
中野山遺跡	集落跡	縄文･飛鳥･奈良	煙道付炉穴･竪穴住居･掘立柱建物･袋状土坑	縄文土器･土師器･須恵器	
筆ヶ崎古墳群	古墳･集落跡	古墳・奈良	古墳･竪穴住居･鍛冶炉	須恵器・土師器・耳環・鈕子・製塩土器	
北山城跡	集落跡	弥生・奈良	竪穴住居･掘立柱建物	弥生土器・砥石・ガラス小玉	
小牧南遺跡	集落跡	古墳・飛鳥	竪穴住居･土抗･ピット	縄文土器･土師器･須恵器	
野添御飯山古墳	―	―	マンボ	山茶椀・砥石	
大松遺跡	散布地	―	なし	なし	
高ノ瀬遺跡	集落跡	古墳～奈良	なし	土師器	
折子遺跡	―	―	なし	なし	
東荒野遺跡	―	―	なし	なし	
小社遺跡	集落跡	中世	土坑	施釉陶器	
釜垣内遺跡	集落跡	縄文・中世	埋納土坑･掘立柱建物･溝･土坑墓	縄文土器・山茶椀・和鏡・金属製品・墨書土器	

要　約	【北山Ｃ遺跡】古墳の周溝 10 条と出土例の少ない須恵器壺形土器が出土。その他、やや時期の降る竪穴住居１棟、奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物それぞれ１棟を検出した。
	【野中遺跡】５ヶ所にトレンチを設定したが、若干のピットと須恵器･土師器片が出土したに止まる。
	【北山Ａ遺跡】飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居８棟、掘立柱建物９棟、焼成土坑１基が確認された。
	【中野山遺跡】縄文時代早期の煙道付炉穴３基、縄文時代中期の袋状土坑４基、飛鳥・奈良時代の竪穴住居 15 棟、掘立柱建物 12 棟などを検出した。
	【筆ヶ崎古墳群】６世紀末から７世紀半頃に築造された横穴式石室をもつ円墳６基と副葬された須恵器、土師器、耳環、鈕子が出土した。さらに、これらの古墳を避けるように奈良時代の竪穴住居 46 棟、掘立柱建物 23 棟、土器棺２基、土坑墓１基が分布し、漆状有機物が付着した須恵器、知多式製塩土器、鉄滓などが出土している。
	【北山城跡】弥生後期から古墳時代初頭にかけての入れ子状に重複する竪穴住居など 38 棟を検出し、弥生後期のものは段丘裾にも分布する。弥生土器の他、ガラス小玉や大型の砥石などが出土している。その他、段丘裾で奈良時代の掘立柱建物３棟なども確認している。
	【小牧南遺跡】12 ヶ所にトレンチを設定した。古墳時代前期と飛鳥時代の竪穴住居などを確認している。
	【野添御飯山古墳】２基の古墳を想定してトレンチを設定したが、近代以降の盛土であることが判明した。その他には近世のマンボを確認した。
	【大松遺跡】２ヶ所にトレンチを設定したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。
	【高ノ瀬遺跡】20 ヶ所にトレンチを設定した。トレンチ壁から土師器甕が出土したため拡張して調査を行ったが、遺構・遺物ともに検出できなかった。
	【折子遺跡】６ヶ所にトレンチを設定したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。
	【東荒野遺跡】５ヶ所にトレンチを設定したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。
	【小社遺跡】中世後期の土坑４基などを検出し、施釉陶器などが出土しているほか、トレンチ調査では弥生前期の深鉢片が出土している。
	【釜垣内遺跡】縄文晩期の埋納土坑１基、鎌倉時代の掘立柱建物やそれを取り囲む溝、土坑墓などを検出した。土坑墓からは山茶椀の他に和鏡や鉄製品などが出土している。

近畿自動車道名古屋神戸線
(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ

２０１３(平成２５)年８月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　文　化　印　刷